

至 目
年 年
月 月
日 日

遼東半島還附一件
松露佛
昭和二十五年十月
放より提供を受く

干渉

第

松 /
4
/
13-1

松本
昭和二十五年十月
放より提供を受く

遼東半島還附一件
露佛
独三国干渉

第

卷

REEL No. 1-0333

0291

松本
三國干渉要概
昭和十五年十月

3-65

佛露獨
三國干渉要概

P.V.M. 1

1708

REEL No. 1-0333

0292

露獨 三國干涉要概

今回露獨佛三國ノ干涉ハ必スシモ意外ニ出テタルニ非ス其徵候遠ク朝鮮事件發生ノ當初ヨリ不斷聯絡シタルモノアリ今其顛末ヲ左ニ記ス
朝鮮事件ノ起ルニ方テ日清兩國ノ軍兵ヲ同時ニ撤回スルヤ否ヤニ就テハ歐洲強國特ニ露國カ最も熱心ニ我政府ニ勸告シ來リタルヲ以テ本大臣ハ露國公使ト數回ノ談判ヲ重テタル後遂ニ昨年六月三十日露國公使ハ其政府ノ訓令ナリトテ左ノ宣言ヲ爲セリ

朝鮮政府ハ同國ノ内亂既ニ鎮定シタル旨ヲ公然同國駐劄ノ各國使臣ニ告ケ又清兵并ニ日本兵ヲ撤回セシムルコトニ付該使臣等ノ援助ヲ請ヘリ因テ本官ノ君主タル皇帝陛下ノ政府ハ本官ニ命シ日本帝國政府ニ向テ朝鮮ノ請求ヲ容レラレムコトヲ勸告シ且ツ日本カ清國政府ト同時ニ在朝鮮ノ兵ヲ撤回スルコトニ付故障ヲ加ヘラル、ニ於テハ重大ナル責ニ任スヘキコトヲ忠告致シ候

松本 比時ニ於テ帝國政府ハ業已ニ數千ノ軍隊ヲ朝鮮ニ送り又同國將來ノ改革ニ關シ
昭和二十五年十月
旅より提議を聞く

日清兩國政府ノ談判ハ結ムテ解ケサルノ際一朝此ノ勸告ニ從ヒ我カ軍隊ヲ引返ストキハ再ヒ清國ノ爲ニ誑カレ事局ノ平和ヲ見ルニ苦ムヘント思ヘリ然レモ露國政府ニ公然ノ回答ヲ爲ス以前先ツ英國ヲ牽制シテ露國ト一致ノ行動ヲ爲サシメサルコト最も必要ト察シタルヲ以テ本大臣ハ即日伊藤總理大臣ト協議シ我カ駐英青木公使ヘ七月一日露公使ヨリノ公文ヲ電報シ且ツ左ノ事ヲ申送リタリ
露公使ノ公文ニ對スル回答ハ閣議決定 勅裁ヲ得タル上ニテ送附セラルヘケレハ其上ハ直ニ閣下ヘ通電スヘシ

清韓ニ對スル我カ要求ハ既ニ報道致シ置キタル通りナリ而シテ最初清國ト協同シテ行ハムトシタルモノハ今ヤ清國ニ關係セス我カ一手ニテ韓政府ヘ申込ミ居レリ

在日本英國臨時代理公使ハ在清同國公使ノ旨ヲ請ケテ本大臣ニ面シ告テ曰ク日本政府ノ提議ニシテ朝鮮國獨立及ヒ變亂豫防ノ事ニ止マリ屬邦問題ニ論及セサルニ於テハ清國政府ハ之ヲ受理スルノ意アリト本大臣之ニ答テ曰ク御申入ノ次第ハ彼是矛盾致シ居リ其意ヲ了解スルヲ得ス併シ右御申込ミノ次第ニシテ苟モ分明ニ説明セラル、ニ於テハ本大臣ハ欣然之ヲ受理スヘ

シト閣下ハ内密ニ英國外務大臣へ以上ノ事ヲ告ケ且ツ伊藤伯及本大臣ハ決
シテ露國ノ差圖ニ從ハサルノ決心ナリトコトヲ申傳ヘラレタシ
其翌日ヲ以テ閣議ヲ決定シ 勅裁ヲ仰キ七月二日左ノ回答ヲ爲シタリ
去月三十日午後露國特命全權公使閣下ヨリ下名ニ手交セラレシ公文ハ頗ル
緊要ニ屬スルモノナルヲ以テ帝國政府ニ於テハ篤ト熟閱ヲ加ヘタリ
右公文ニ朝鮮政府ハ同國ノ内乱既ニ鎮定シタル旨ヲ公然同國駐劄ノ各國
使臣ニ通告シタリト記載セラレタルモ帝國政府カ接受シタル最近ノ報告ニ
據レハ不幸ニモ朝鮮政府ノ該通告ハ大早計ニ出テタリト言ハサルヲ得ス然
リ而シテ右最近ノ報告ニシテ帝國政府カ確信スルカ如ク事實ナルニ於テハ
管ニ事變ヲ醸成スルノ原因未タ芟除セラレサルノミナラス日本兵員ヲ派遣
スルノ已ヲ得サルニ至ラシメタル變乱モ猶ホ未タ全ク其跡ヲ絶ツニ至ラス
シテ之カ處分ヲ要スルモノ、如シ而シテ今若シ該變乱ノ根源ニシテ全然掃
攘セラレサルトキハ將來又常ニ擾亂紛騷ヲ惹起スコトヲ免レヌ
帝國政府ノ措置ハ疆土侵畧ノ意ニ出テタルモノニ非スシテ全ク現在ノ形勢
ニ對シテ已ヲ得サルノ必要ニ應スルニ外ナラス

是故ニ帝國政府ニ於テ朝鮮國內ノ形勢全ク平穩ノ域ニ復シ將來復タ何等ノ
虞ナカルヘシト認ムルニ於テハ目下朝鮮ニ在ル所ノ日本兵員ヲ撤回スヘキ
コトハ下名ハ之ヲ露國特命全權公使閣下ニ明言スルニ躊躇セサルナリ
帝國政府ハ露國皇帝陛下ノ政府カ友厚ナル勸告ニ對シテ謝意ヲ表スルト同
時ニ兩國政府間ニ幸ニ現存スル相互ノ信義ト好誼トニ因リ今下名カ爲セシ
明言ハ露國政府ニ於テ十分信ヲ置カルヘキコトハ帝國政府ノ信シテ疑ハサ
ル所ナリ

露國政府ハ此ノ回答ニ對シ最初強迫ナル宣言ヲ爲シタルニモ係ハラヌ表面満足
ヲ表シタリ然レモ其裏面ニ於テハ我カ釁隙ニ乘シ干涉ノ端ヲ開カムトノ野心ヲ
抱キ居タルコト明白ナリ而シテ當時我政府ハ露國ト直チニ葛藤ヲ生スルコトヲ
避クルカ爲メ右回答ト同時ニ「朝鮮ノ獨立ヲ侵害セサル事、清國軍隊ヨリ攻撃シ來
ラサル間ハ我ハ常ニ防禦ノ地位ヲ取ルヘキ事」ノ二個ノ條件ヲ約シタリ第二ノ條
件ハ豊島ノ役ニ於テ清國ノ軍艦ヨリ我軍艦ニ向テ先ツ砲撃ヲ始メタルニ因リ自
然ニ日本政府ノ責任ハ解ケタレトモ第一ノ保證即チ朝鮮ノ獨立ヲ維持スルノ條
件ニ於テハ當初ヨリ今日ニ至ルマテ日本政府ノ責任トナリ來リ居レルコト勿論

P.V.M. 1

1712

P.V.M. 1

1711

ナリ而シテ其後牙山及平壤ノ戰捷アリシ以來歐洲各國ノ日清兩國ヲ觀察スルノ見解ハ稍初メニ異ナリタル如キ感アリト雖其間友誼若クハ一般平和ノ爲メタル名ヲ以テ速カニ干戈ヲ戢ムヘシトカ若クハ餘リ極度迄戰爭ヲ繼續スヘカラストカノ忠告アリタルコトハ殆ト各國一様ニシテ或ハ連帶シ或ハ特別ニ之ヲ爲シタリ二十七年十月八日東京駐在英國公使ハ本大臣ニ面會シ口頭ヲ以テ其政府ノ意トシテ左ノ如キコトヲ申出テタリ

各強國ニ於テ朝鮮ノ獨立ヲ擔保スル事及清國ヨリ償金ヲ拂ハシムル事ヲ條件トシテ戰爭ヲ息止スレハ如何是レニ就テハ露國公使ヨリモ同様ノ勸告アルヘシト云ヘリ

然ルニ此間本大臣竊カニ以爲ラク英露ノ東洋ニ於ケル利害ハ從來相同フスルコト能ハサルモノアルハ明白ナレト現今ノ形勢ニ於テ日本カ清國ヲ極度迄ニ押付ケ同國カ四分五裂トナルニ至ルコトハ英露各其底意ヲ異ニスルモ共ニ之ヲ欲セサルヘキヲ以テ或ハ奇怪ナル英露同盟ノ勸告ヲ來タスモ保シ難シト因テ此際外交手段ニ依リ英露ノ間ヲ分裂セシムルノ手段ヲ施シタリ然ルニ英國政府ハ其首相「ローズベリ」伯「カギルドホール」ノ宴會ニ於テ演說シタル如ク各國聯合シテ

五 六

日本ニ勸告セムコトヲ各國ヘ照會シタル由ナレト露國ヲ始メ之ニ對シテ應スルモノナク遂ニ英國ノ輿論迄モ英政府ノ處分ニ反對スルニ至リタルノ感アリ即チ「タイムズ」ハ其十月十日ノ社説ニ於テ英國ノ干涉政畧ニ對シ左ノ如ク論シタリ

日本ハ連戰連勝ノ際容易ニ其大望ヲ棄テサルヘシ故ニ交戰ヲ息止スルコトハ勿論暫ラク之レヲ中止セシメムト企ツルモ決シテ成効ノ見込ミナキコト瞭カナリ但シ非常ノ大軍ヲ派出シ之レヲ後楯トシ戰爭ヲ停メムトセハ或ハ其詮アルヘケレトモ是レ決シテ爲シ得ヘキニアラサルハ復タ論ヲ俟タス故ニ居留歐洲人ヲ保護スル外ニ交戰國ヲ壓制的ニ抑服セムト企ツルモノハ自カラ困難ノ地位ニ陥リ東洋ニ於ケル最強國ノ爲メニ敵視セラレ、ニ至ルヘキナリ要スルニ局外國ハ日清國際ノ紛議ヲ決スルニ全ク之レヲ該兩國ノ干戈ニ任セサルヘカラス

右ノ如キ狀況ナルヲ以テ日清交戰ノ結局ハ表面上ヨリ云ヘハ單ニ日清兩國ノ事件ナレトモ多少歐洲諸國ノ利害若クハ想像的ノ利害ニ關係スルコトナシニ無事ニ平和ニ歸スヘシトモ思ハレス故ニ英國政府ヨリ干涉ノ際ニ一書ヲ在廣島ナル總理大臣ニ寄セ左ノ甲乙案ヲ具シ同大臣ノ意見ヲ問ヒ其同意ヲ得ハ 勅裁ヲ

P.V.M. 1 1714

P.V.M. 1 1713

得ムコトヲ以テシタリ

(甲案)

- 一、清國ニ於テ朝鮮ノ獨立ヲ認メ且ツ朝鮮ノ内政ニ干渉セサル永久ノ擔保トシテ旅順口及ヒ大連灣ヲ日本ニ割與スル事
 - 二、清國ハ日本ニ向テ軍費ヲ償還スヘキ事
 - 三、清國ハ其歐洲各國ト締結ノ條約ノ基礎ニテ日本ト條約ヲ締結スヘキ事
- 清國ハ以上平和ニ復スル爲メノ條件ヲ滿タス迄ノ間日本政府ヘ向テ充分ノ擔保ヲ與フヘキ事

(乙案)

- 一、各強國ニテ朝鮮ノ獨立ヲ擔保スル事
 - 二、清國ハ臺灣全島ヲ日本ニ割與スヘキ事
 - 三、清國ハ日本ニ向テ軍費ヲ償還スヘキ事
 - 四、清國ハ其歐洲各國ト締結ノ條約ノ基礎ニテ日本ト條約ヲ締結スヘキ事
- 清國ハ以上平和ニ復スル爲メノ條件ヲ滿タス迄ノ間日本政府ヘ向テ充分ノ擔保ヲ與フヘキ事

七 八

此ノ意見ハ即チ今回日清媾和條約ノ殆ト基礎トモ謂フヘキモノニシテ總理大臣ハ其第一案ニ同意ヲ表シ來リタレトモ尙ホ暫ラク之ヲ外國ニ發表スルコトヲ見合スヘシトノ意見ニ由リ英國ヘハ十月二十三日左ノ如キ回答ヲ與ヘ置キタリ

帝國政府ハ英國皇帝陛下ノ政府ヲシテ質義ヲ發セシムルニ至リタル所ノ好誼ヲ十分ニ感謝ス今日ニ至ルマテ勝利ハ日本ノ軍隊ニ伴ヒタリ然レトモ帝國政府ハ戰爭ノ現狀ニ於テハ尙ホ事体ノ進歩ヲ以テ滿足ナル談判上ノ結果ヲ保證スルニ足ルモノト思考スル能ハス因テ帝國政府ハ戰爭ヲ終結スル條件如何ニ關シ其意志ヲ發表スルコトヲ見合スノ已ムヲ得サルヲ認ム

又合衆國大統領ハ日清間ノ戰爭永ク繼續スルニ於テハ他ノ強國ヨリ干渉ヲ來タシ隨テ日本ノ不利益トナルヲ慮リ友誼上ヨリ兩國間ノ平和ノ爲メ仲裁ノ勞ヲ取ルコトニ關シ帝國政府ノ意向ヲ知り度旨ヲ以テ十一月六日在本邦同國公使ニ左ノ通り訓令シタリ

痛嘆スヘキ日清兩國間ノ戰爭ハ亞細亞ニ於ケル北米合衆國ノ政畧ヲ危殆ナラシムルモノニ非ス兩交戰國ニ對スル我國ノ意向ハ友誼ヲ重シ不偏不黨中立ヲ守リ兩國ノ幸運ヲ希望スルニ外ナラサルナリ然レモ若シ爭鬪久シキニ

P.V.M. 1 1716

P.V.M. 1 1715

亘リ海陸ニ於ケル日本軍ノ運動ヲ限制スルノ道ナキニ於テハ該地方ニ利害ノ關係ヲ有スル他ノ諸國ヨリ日本將來ノ安全幸福ニ不利ナル要求ヲ爲シ戰爭ノ終局ヲ促スニ至ルモ亦保シ難シ米國大統領ハ從來日本ニ對シ最モ厚キ好意ヲ抱クカ故ニ若シ大統領ニシテ平和ノ爲メ日清兩國双方均シク名譽ヲ毀損セサル如キ仲裁ノ勞ヲ執ラムトセハ日本政府ニ於テハ之ヲ承諾スヘキヤ否ヲ探知スルコトヲ閣下ニ訓令ス

米國公使ハ右ノ訓令ヲ本大臣ニ示シ帝國政府ノ意向ヲ承知シ度旨申出テタレ本大臣ノ所見ニテハ未タ平和ノ談判ヲ開クノ時機ニアラスト信シタルニ因リ總理大臣トモ協議ノ上十一月十七日左ノ通り回答シ置キタリ

日清兩國間ノ和睦ノ爲メニ調停ノ勞ヲ執ラムト欲セラル、合衆國政府ノ原情ハ帝國政府ノ謝スル所ナリト雖、交戰以來今日迄帝國兵力ニ因テ到ル處全勝ヲ獲タレハ今戰ヲ息ムル爲メニ友國ノ協力ヲ乞フコトヲ要セスト思フス但シ帝國政府ニ於テハ今回ノ戰爭ヨリ生スヘキ正當ノ結果ヲ取ムルコトヲ確保スルニ足ルヘキ限ノ外ハ徒ニ勝ニ乘シテ意ヲ逞フセムトスルニ非ス尤清國政府ヨリ直接ニ帝國政府ニ向テ媾和ノ議ヲ開クニ至ルマテハ帝國政

府ハ右ノ限ニ達シタルモノト看做スコト能ハス

然ルニ其後日清戰爭ノ事体ハ一日ニ進歩シ第一軍ハ九連城鳳凰城ヨリ殆ト海城柞木城ニ進ミ第二軍ハ金州大連灣ヲ陷レ遂ニ旅順口ヲ占領シ將ニ威海衛ヲ攻撃セムトスルノ際ニ及ヒ殆ト各國政府ハ聯合シテ日本政府カ兵馬ヲ以テ清國ノ版圖ヲ蹂躪シ四分五裂ノ悲境ニ陥ラシムルノ結果ヲ生スルコトハ各國政府ノ袖手傍觀シ能ハサルトコロナリ又日本政府ニ於テ支那大陸ノ地ヲ割讓セシムルコトハ各國中多少異議アルヘキノ旨ヲ以テシタリ然レトモ此ノ勸告ハ各國甚々熱心ナル様ニモ見ヘス又大陸ノ地ヲ日本ニ割與スルコトハ各國ノ内ニ異議アルヘシト雖、其當局勸告者ノ自國ノ利害ニ關スルト云ヒタルモノハ一人モナシ然ルニ此際恰モ清國政府ハ平和條約ヲ締結スル爲メニ使臣張蔭桓邵友濂ヲ本邦ニ派遣スル旨米國公使ヲ經テ通知シ來リタリ故ニ我ハ之ヲ廣島ニ迎ヘテ談判スルコトニ廟議一決シ本大臣ハ平和條約ノ基礎ヲ草シ閣議決定ノ上之ヲ廣島ニ携ヘ御前ニ於テ重要ナル文武官ト更ニ之ヲ再議シ一統同意ノ上勅裁ヲ得テ之ヲ條約案ノ基礎トシ張蔭桓等カ來リタル上開談スルノ準備ヲ爲シタリ當時御前會議ニ於テ總理大臣ノ演說ハ左ノ如シ

博文カ今茲ニ謹テ聖明ノ聽ニ達シ併セテ露下ノ帷幕ニ參與スル文武各官ニ
向テ陳述セムト欲スルモノハ今回清國政府ハ媾和ノ爲メ使節ヲ我國ニ派遣
シ其來朝將サニ遯キニ在ラムトス因テ該使節ニ會見スルニ先タチ外務大臣
ト協議シ種々ノ審査ニ從事シ別冊媾和預定條約案ヲ草シ之ヲ閣臣ノ議ニ付
シ其協同一致ヲ經タリ惟フニ今回ノ日清事件ノ如キハ我朝開關以降未曾有
ノ大事件ニシテ幸ニ 陛下ノ御威稜ニ賴リ開戰以來今日ニ至ル迄海ニ陸
ニ到ル處捷ヲ奏シテ以テ我國ノ武威ヲ耀シ又第三國ヨリ干涉ノ端ヲ啓キタ
ルモ時ニ及テ之ヲ擺脫シテ其甚シキニ至ラシメス以テ今日ニ至リタリト雖
モ本件ノ結果如何ニ依テハ實ニ我國將來ノ隆替ニ關スル所アレハ今此ノ異
變ノ局ヲ収ムルニハ宜ク慎重ニ熟籌シ時ヲ鑒ミ機ヲ察シ以テ之ニ適應スル
ノ計ヲ講セサルヘカラサルハ亦言ヲ待タサルナリ

十一

十二

ク又帷幕ノ臣僚ハ他日之ニ對シテ毫モ異議ヲ挾ムヘカラサルコトタリ何ト
ナレハ閣臣ト云ヒ又帷幕ノ臣ト云ヒ均シク皆 陛下ニ左右シテ互ニ文武
兩班ノ上位ヲ辱フスルモノニシテ恰モ車ノ兩輪鳥ノ兩翼アルカ如クナレハ
各相駢行均動シテ以テ人身ノ肢體カ其頭腦ノ指命ニ應シテ常能ヲ顯ハスカ
如クナレハ此ノ如ク苟モ廟謨ヲ畫策スル所ノ開幕兩臣ノ意思一ニ歸スル
ニ於テハ縱ヒ世上ニ如何ナル物議アリトモ敢テ顧慮スルニ足ラサルナリ
此ノ媾和預定條約中ノ欸項ハ今回日清兩國カ交戰ニ至リシ主因タル朝鮮國
獨立ノ件將來戰畧上ニ必要ナル土地讓與ノ件軍費賠償ノ件及將來帝國臣民
カ清國ニ於テノ通商航海ノ便益ニ關スル件等ヲ以テ其主眼トシ其他ハ其重
要ノ度右數件ニ次クモノニシテ都合十個條ヲ以テ成立セリ

D.V.M. 1

1720

P.V.M. 1

1719

地位ニ陷ルヨリモ寧ろ今ニ於テ假令多少其豫期外ノ讓與ヲ爲スモ此ノ變局ヲ取結スルコト得策ナルヘケレトモ博文カ清國ヲ知ル所ヲ以テ察スルトキハ所詮彼ハ將來危難ヲ避クルカ爲メニ今日ニ當リテ斷然決心スル所アルヘシトハ信セラレス若シ果シテ然ルトキハ今度假令雙方ノ全權委員相會合スルモ蓋シ一ノ成議ヲ見ルニ至ラヌシテ終ルヘシト推測スルモノナリ然リト雖モ若シ萬一ニモ豫期スル所ニ反シ清國ニ於テ大ニ決心一番セシ所アリトセムカ此回ノ會合ニテ本件ノ取局ヲ告クルコトナシトモ云フヘカラス清國媾和使トノ談判ノ成否ヲ論セス若シ一旦媾和ノ條件ヲ明言スルニ於テハ因テ以テ第三國ノ容喙干涉ヲ招致スルコトナキヲ保セス否殆ト免ルヘカラサルノ數ナリトス但シ其干涉ノ如何ナル性質ナルヘキヤ又如何ナル度合ナルヘキヤノ點ニ至テハ假令如何ナル賢明ナル政治家ト雖モ固ヨリ之ヲ豫測スルコト能ハサル所ニシテ况ムヤ他國ヲシテ毫モ干涉セシメサルヘシトノ保證ヲ爲スコトハ尙更能ハサル所ナリ而シテ斯ル干涉ニシテ早晚竟ニ免ルヘカラサルモノトスルトキハ時機ヲ察シ外交上ノ手段ニ依リ弛張操縱其宜ヲ得ルヲ務ムルコトハ勿論ナルヘケレトモ原來斯ル場合ニ當テ各強國カ

十三

十四

執ル所ノ政畧方針ニ至テハ樽俎ノ間ニ之ヲ他ニ轉セシムルコト能ハサル例往々多キカ故ニ萬一斯ル干涉ヲ來リ試ルコトアルトキハ右第三國ノ意向ヲ斟酌シテ清國ニ對スル我カ條件ヲ多少變更セサルヲ得サルニ至ルヘキカ又ハ寧ろ更ニ他ノ強敵ヲ加フルモ飽迄我カ廟算ノ在ル所ヲ維持シテ動かサルカニ至テハ未來ノ問題ニ屬スレハ其時ニ應シテ更ニ評議ヲ盡スヘキコト、

要之今日此局ヲ取結セムトスルニハ文武兩臣各其心ヲ一ニシ成算ヲ鞏守シテ深ク其秘密ヲ保チ外間ヲシテ毫モ之ヲ窺知セシメス終始一轍ニ之ヲ貫行スルコトヲ要ス而シテ其談判ノ衝ニ當ル者ニ至テハ廟謨ヲ奉行スルノ責ニ任スヘキモノナレハ其人ヲ遴選シテ 大命ヲ下サル、コトハ一ニ陛下ノ聖裁ニ是レ依ルヘキナリ 陛下ノ聖鑒ヲ仰クト同時ニ茲ニ列席セラル、所ノ文武兩臣ノ深ク省察ヲ加ヘラレムコトヲ乞フ 然ルニ閣議既ニ經文武官ノ協議既ニ整ヒ勅裁既ニ降シ玉ヒタル上ハ此案即チ條約ノ基礎タルヘクシテ一言ニ云ヘハ清國ニ向テ戰爭ノ結果トシテ日本政府カ要

P.V.M. 1

1722

P.V.M. 1

1721

求スル所ノ條件ハ盡ク此案ニ含蓄スルモノナリ故ニ本大臣ハ先ツ總理大臣ニ向
ヒ各國ノ干涉ハ到底早晚免レサルモノトセハ清國ト談判スルニ先タチ此條約案
ニ在ルトコロノ條件ノ大意ヲ以テ歐洲各國就中英露等ノ内意ヲ取極メ置クコト
得策ニ非スヤトノ議ヲ提出シタリ然ルニ總理大臣ハ各國ノ干涉ハ到底免レサル
モノトスルモ今之ヲ各國ニ提出シ其内諾ヲ得ムトセハ必ス彼ヨリ多少ノ容喙ヲ
來タスコトヲ期セサルヘカラス或ハ此條件中ニ對シ痛ク異議ヲ唱フルモノナキ
ヲ保セス然ラハ我政府カ清國ニ向ヒ要求セムトスル條件中先ツ各國ノ異議アル
コトヲ前知シ居ルニモ係ハラズ之ヲ要求セサルヲ得サルカ若クハ強テ各國ノ異
議ヲ避ケムトスレハ此ノ條件中ヨリ先ツ其々ノ條項ヲ削除セサルヲ得サルカノ
困難ヲ生スヘシ寧ロ我ハ清國ニ向テハ我カ要求セムトスルトコロノ極度マテ要
求スヘシ語ヲ換ヘテ云ヘハ清國ニ向テハ戰爭ノ結果ヲ全ク収メ然ル後他ノ強國
ヨリ異議アルトキハ更ニ評議スルコト、シテハ如何トノ議アリ本大臣モ直チニ
之ニ同意シタルノミナラス當時大本營ニ列シタル重要ノ文武官モ亦皆總理大臣
ノ說ヲ賛成シタリ然ルニ清國使臣張蔭桓等ハ其攜帶スルトコロノ全權委任狀ノ
不備ナルカ爲メニ平和條約ノ本題ニ入ルコト能ハスシテ遂ニ之ヲ拒絕セサルヲ

十五

十六

得サルニ至リタリ其大意ハ伊藤全權辦理大臣カ同會議席ニ於テ左ノ如ク演述シ
タリ

本大臣カ今同僚ト俱ニ將サニ採ラムトスルノ處置ハ論理上已ムコトヲ得サ
ルノ結果ニ出ツルモノニシテ其責素ヨリ本大臣等ニ歸スヘキニ非ス
從來清國ハ殆ト列國ト全然啖離シ時ニ或ハ列國ノ社團ニ伍伴スル爲メニ生
スル所ノ利益ヲ享受シタルコトアルモ其交際ニ伴フ責守ニ至テハ徃々自カ
ラ顧ミサルコトアリ清國ハ常ニ孤立ト猜疑トヲ以テ其政策トス故ニ其外交
上ノ關係ニ於テハ善隣ノ道ニ必要トスル所ノ公明ト信實トヲ缺クヤ宜ナリ
清廷ノ欽差使臣カ外交上ノ盟約ニ付公然合意ヲ表セシ後却テ翻然トシテ之
ニ調印スルコトヲ拒ミ或ハ儼然既ニ締結シタル條約ニ向テ更ラニ明白ナル
理由モナク漫然之ヲ拒否セルノ實蹟一ニシテ足ラス
右等ノ實蹟ニ就テ之ヲ徵スルニ當時清廷ノ意中操持スルノ誠實ナク其談判
ノ局ニ當レル欽差ニ至テモ亦必要ナル權利ヲ委任セラレサルコト比々皆然
ラサルナキヲ見ルヘシ
故ニ今日ノ事アル當初ニ於テ我帝國政府ハ先ツ既往ノ事實ニ鑑ミ全權ノ定

P.V.M. 1

1724

P.V.M. 1

1723

義ニ協ハサル清廷ノ欽差トハ一切談判ヲ避クルノ決意ヲ以テ斷然媾和談判ヲ開クニ當リ清廷ノ委任者ハ媾和締結ニ對スル全權ヲ有セサルヘカラサルヲ以テ豫メ一ノ條件トナシタリ而シテ清廷ハ此ノ條件ヲ恪遵シテ其全權者ヲ我國ニ派遣セラレタリトノ確然タル擔保ヲ認メ我大日本 天皇陛下ハ本大臣并ニ同僚ニ委スルニ清廷ノ全權者ト媾和ノ豫定條約ヲ締結シ之ニ調印スルノ全權ヲ以テシ給ヘリ

清帝ハ既ニ此ノ擔保ヲ爲シタルニ拘ハラズ兩閣下ノ委任權ノ甚タ不完全ナルハ清廷ノ意未タ和ヲ求ムルニ切ナラサルコトヲ確認スルニ足ルヘシ昨日此席ニ於テ交換シタル雙方ノ委任狀ハ一見以テ其軒輊ノ甚シキヲ知ル殆ト批判ヲ俟タスト雖_レ茲ニ之ヲ指摘スルモ敢テ徒爲ノ業ナラサルヲ信ス即チ一ハ開明國慣用ノ全權ノ意ニ適フモ他ハ全權委任ニ須要ノ諸項幾ト悉ク缺乏シタルコト是レナリ加之兩閣下カ携帶セラレタル委任狀ハ閣下等カ談判セラルヘキ事項ヲ明カニセス又何等訂約ノ權利ヲ與ヘス且ツ兩閣下ノ所爲ニ對スル清國皇帝陛下事後ノ批准ニ就テモ一言スル所ナシ之ヲ要スルニ閣下等ニ委テラレタル職權ハ本大臣及同僚カ陳述スル所ヲ聞テ之ヲ貴政

十七

十八

府ニ報スルニ止マルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ臻ル本大臣等ニ在テハ此上談判ヲ繼續スルコト決シテ能ハサル所ナリ或ハ云ハム今回ノ事ニ於テハ敢テ從來ノ慣例ニ背ムキタルモノニ非スト本大臣ハ斷シテ此ノ如キ説明ヲ以テ足レリトスル能ハス清國內地ノ慣例ニ至テハ本大臣素ヨリ之ニ容喙スルノ權ナシ然リト雖_レ我國ニ關連スル外交上ノ案件ニ至テハ清國特殊ノ慣例ハ國際上ノ法則ニ凌駕セラレ裁抑ヲ受ケサルヘカラサルコトヲ主張スヘキハ獨リ本大臣ノ權利ナルノミナラス又本大臣ノ義務ナリト信ス抑_レ平和ノ克復ハ至重至大ノ事ナリ今再ヒ輯睦ノ道ヲ啓カムトセハ固ヨリ之ヲ目的トシテ條約ヲ締結スルノ必要アルノミナラス其互ニ締約スルトコロモ亦必ス之カ實賤ヲ期スルノ誠衷ナカルヘカラス媾和ノ事ニ關シテハ我帝國ヨリ進ムテ清國ニ求ムヘキ理由ヲ見スト雖_レ我帝國ハ其代表セル開明ノ主義ヲ重ムスルヲ以テ清廷カ至當ノ道軌ヲ履ミ其緒ヲ開クニ於テハ之ニ應スルノ義務アリト信ス然リト雖_レ無効ノ談判若クハ紙約ニ止マルノ媾和ニ參與スルカ如キハ將來堅ク謝絶スル所ナリ我帝國

P.V.M. 1

1726

P.V.M. 1

1725

ハ一旦締約シタル所ノ條件ハ必然之ヲ實踐スヘキヲ明言スルト同時ニ清國
ニ向テモ亦此ノ如ク其履行ヲ確メサルヘカラサルナリ
是故ニ清國カ切實信誠ニ和ヲ求メ其使臣ニ委ヌルニ現實ノ全權ヲ以テシ且
ツ其締結セル條約ノ實踐ヲ擔保スルニ足ルヘキ各望官爵アル者ヲ擇ムテ此
ノ任ニ當ラシムルニ於テハ我帝國ハ更ニ談判ニ應スルヲ拒マサルヘシ
當時本大臣カ携帶シタル所ノ條約本案ハ遂ニ清國使臣ニモ示メサスシテ談判ハ
破裂スルニ至リタリ然ルニ是レヨリ先キ各國政府就中露國ヨリハ平和條約ノ條
件ヲ知ラムコトヲ欲シ且ツ露國ハ日本、清國及朝鮮ニ鄰スル國ナルカ故ニ日本政
府カ抱持スル意見ヲ聞キ又露國ノ意見ヲモ言ヒ互ニ其意見ヲ交換スルノ權利ア
リト主張シ居タル際ニシテ即チ最初ヨリノ干涉ヲ繼續セムトスルノ深意アリタ
ルコト顯然タリ然ルニ清國ノ使節ノ來朝セサル以前ニ在リテハ我政府ハ戰爭ノ
結末如何ニ由リ其條件ヲ定ムルコトナルヲ以テ今豫メ之ヲ明言スルコト能ハス
トノ答ヘハ事實ハ兎モ角モ論理上言ヒ得ヘキ事ナリシモ既ニ清國ノ使節カ一回
來朝シタル上ハ我政府ノ提案ナキヲ得サルニ付是迄露公使等ニ隱蔽シタル如ク
最早長ク之ヲ秘スルコト能ハサル場合トナリ又多少其端緒ヲ露國政府ニ知ラセ

十九
二十

置クモ後難ヲ避クルノ一策ナラムト思ヒタルカ故ニ廣島ヨリ歸京ノ際篤ト總理
大臣トモ評議シ時機ヲ見計ヒ露國公使ニハ大体ノ趣意ヲ話スヘキコト、シタリ
然ルニ清國政府ハ張蔭桓等ノ全權委任狀ノ不備ナリシカ爲メニ談判破レタルコ
トヲ遺憾トシ更ニ完全ナル全權委任狀ヲ携帶シ清國政府中重要ノ職ニ在ルモノ
ヲ再ヒ日本ヘ派遣シ平和條約ヲ訂結セムコトヲ申來リタルニ際シ露國公使ハ二
月十四日ヲ以テ本大臣ヲ外務省ニ訪ヒ其政府ノ訓令ナリト稱シ再ヒ日露兩國間
ニ於テ意見ヲ交換スルハ兩國ノ爲メニ有益ナル旨ヲ說出シタルニ由リ本大臣ハ
其機ニ乘シ我政府ハ清國トノ戰爭ノ結果トシテ請求スルトコロハ充分ニ其請求
ヲ遂ケ得ヘキ權利アリ而シテ今日ノ場合トナリテハ土地ノ割讓ハ是非トモ請求
セサルヲ得サルコト、思ヘトモ之カ爲メニ他國特ニ露國ノ利害ニ關スルコトア
ラハ前以テ承知致置度左スレハ其露國ノ利害ニ關スル事ニ就テハ成丈我政府ニ
於テ之ヲ避ケ得ヘキ準備ヲ爲サ、ルヘカラス腹藏ナク申聞ケラレタシト述ヘタ
ルニ露國公使ハ貴國ニ於テ清國ヨリ土地ヲ取ラル、コトハ勿論ノ事ナリ然レト
モ露國ハ太平洋ノ沿岸ニ於テ自由ノ通路ヲ得ムコトヲ欲スルヲ以テ曾テ貴政府
ニ於テ言明セラレタル如ク朝鮮ノ獨立ヲサヘ確メラル、ニ於テハ其以外ニ別ニ

P.V.M. 1

1728

P.V.M. 1

1727

言フヘキコトナシト答ヘタリ且ツ殆ト同公使ノ私話ノ体ヲ以テ臺灣ヲ割讓キシ
ムルコトニ於テハ露國ハ固ヨリ異存ナカルヘキモ大陸中ニ地面ヲ取ラル、コト
ハ日本國ノ爲メ決シテ得策ニアラスト思フト言ヒタルニ付本大臣ハ之ニ對シ今
御相談スル所ハ此事ニ關シ露國ノ利害ヲ知ラムト欲スルモノニシテ日本自己ノ
利害得失ニ至テハ自ラ本大臣等カ計畫スルトコロアルヘシト言ヒタルニ露公使
ハ話頭一變シテ大陸ノ地ヲ取ラル、コトハ歐洲中ニ於テ多少異議ヲ唱フルモノ
アルヘシト言ヘリ此ノ前後ノ口氣ヲ以テ見レハ帝國ノ遼東半島ヲ畧取スルコト
ハ露國ニ於テ必ス異議ヲ唱フヘキコトハ推察スルニ餘リアリト雖也彼ヨリ明言
セサルモノヲ我ヨリ之ヲ挑發スルノ必要ナキヲ以テ更ニ本大臣ハ同公使ニ向ヒ
今本大臣カ貴公使ト問答スルトコロノモノハ露國ノ利害ヲ知ラムト欲スル爲メ
ニシテ他ノ歐洲各國ノ利害ニ至テハ或ハ本大臣ハ其利害ヲ有スル國ト直接ニ相
談スルヤモ計リ難ケレハ今是ニ於テ貴公使ト御相談スルノ必要ナキコト、思フ
兎モ角モ事ノ大小ニ拘ハラズ貴國政府ハ朝鮮ノ獨立ヲ確認スルノ外何カ此件ニ
關シ利害ノ觀念ヲ懷カル、ヤト問ヒタルニ同公使ハ今別ニ言フコトナキモ若シ
日本軍隊カ直隸ヲ進撃スルニ至ラハ大ニ露國ト清國トノ茶葉貿易ヲ妨害スルニ

二十一

二十二

付右ハ充分御注意アラムコトヲ請フト言ヒタルノミ
前ニ陳ヘタル如ク清國政府ヨリハ愈更ニ全權委員ヲ派遣スヘキコト確然シタル
ニ因リ帝國政府ハ二月十六日米國公使ヲ經テ口上書ヲ以テ左ノ通り清國政府ヘ
申入レタリ

日本國政府ハ清國全權委員ニ於テ償金支拂及ヒ朝鮮ノ獨立ヲ認諾スルノ外
ニ戰爭ノ結果トシテ土地ノ讓與ヲ爲スコト及ヒ將來ノ交通ヲ律スル爲メ確
定條約ヲ訂結スルコトヲ基礎トシ全權ヲ以テ商議スル積リニテ來ルニアラ
サレハ清國ヨリ再ヒ媾和使節ヲ簡派スルモ其益ナカルヘキコトヲ言明ス
又此他之ニ次クヘキ緊要ノ問題ニシテ別ニ規定ヲ要スヘキモノアリ
日本國政府ハ此外必要若クハ便宜ト認ムルモノアレハ何時モ更ニ其要求ヲ
提出シ得ヘキ權利ヲ保有ス

然ルニ清國政府ハ米國公使ヲ經テ右ノ請求ヲ承諾シタル旨ヲ申來リタルヲ以テ
清國政府ニ於テハ朝鮮ノ獨立ヲ認メ償金ヲ拂ヒ土地ヲ割讓シ及ヒ新タニ歐米各
國ト清國トノ間ニ締結シタルトコロノ條約ヲ基礎トシタル通商條約ヲ結ブノ四
要點ニ於テハ先ツ承諾シタルノ形ヲ顯ハシタリ

P.V.M. 1 1780

P.V.M. 1 1729

是ニ於テ本大臣ハ林外務次官ヲシテ露國公使ニ面會シ日本政府カ清國政府ニ要
求スル條件ハ云々ナリト前ノ四要點ヲ告ケシメタルニ其後二月二十四日露國公
使ハ其政府ノ訓令ナリト稱シ露國政府ハ日本ニ於テ朝鮮ノ獨立ヲ名義上ニ於テ
モ事實上ニ於テモ侵害セサル限リハ他ノ事ニ就テハ敢テ異議ヲ唱フルモノニ非
ス若シ日本政府此事ヲ保證セラル、ニ於テハ日本ヨリ清國ニ申出テタル條件ニ
關シ充分ノ全權ヲ有スル使節ヲ派遣スル様露國政府ヨリ清國政府ニ勸告シ又他
ノ強國ヘモ露國ト同一ノ方針ニ出ツルコトヲ勸誘スルモ差支ナキ旨申出タリ因
テ本大臣ハ二月二十七日左ノ通りノ口上書ヲ同公使ヘ交付シタリ

本月二十四日露國公使閣下ヨリ口頭ニテ開陳セラレタル所ニ依リ帝國政府
ヨリ西公使ヘ發送セシ電信中ニ記載セシ所ノ媾和ノ基礎ハ若シ日本國ニテ
露國政府カ單ニ屬望シ居ルカ如ク見ユル所ノ朝鮮國ノ獨立ヲ認ムルニ於テ
ハ右ノ基礎ヲ肯諾スルコトヲ清國ニ勸告シ且ツ其他ノ強國ヲ勸誘シテ清國
政府ヘ同様ノ勸告ヲ爲サシムルコトニ付露國政府ノ贊助ヲ得ヘキコトヲ知
悉セシハ帝國政府ノ欣悅スル所ナリ

二十三

二十四

國ニ對スル政畧方針ハ更ニ變セシコトナク帝國政府ハ名實共ニ朝鮮國ノ獨
立ヲ認メ居ルコトヲ宣言スルニ躊躇セサルナリ

其後茶業貿易ノ事ニ付三月十二日左ノ通り申來リタリ

露國ノ茶業貿易ハ漢口ヨリ天津ニ到リ彼處ヨリ二ツニ分レ一ハ海路印度ヲ
經テ歐洲ニ至リ一ハ陸路キアクタニ至ル故ニ日本軍カ直隸地方ニ進ムニ方
リ右海陸ノ茶業貿易ヲ妨害セサル様日本政府ト協議致シ置クヘキ旨本國外
務大臣ヨリ訓令アリタルニ付外務大臣ノ回答ヲ得タシ

右ニ對シ本大臣ハ三月十六日林外務次官ヲシテ左ノ通り口頭ヲ以テ回答セシメ
タリ

直隸地方ヲ通過スル茶貿易ニ關スル露國政府ノ請求ニ對シ日本政府ハ其作
戰進軍上萬已ムヲ得サルニアラサル外ハ必ス該貿易ニ障害ヲ與ヘサラムコ
トヲ露國政府ニ向テ言明ス

右ノ如キ談判ノ始末ナルカ故ニ露國ノ深意ハ甚々疑訝スヘキモノナキニアラサ
レトモ表面上ニ於テハ唯朝鮮ノ獨立ヲ確認スルノ外他ニ求ムル所アルヲ見サル
ナリ

P.V.M. 1

1732

P.V.M. 1

1731

是レヨリ先キ在巴里倫敦タイムスノ通信員ハ日本ニ於テ若シ支那大陸ノ一部ヲ
畧取セハ各國聯合シテ之レヲ防止スヘシトノ事ニ關シ二月七日付ヲ以テ左ノ如
キ通信ヲ掲ゲタルコトヲ加藤公使ヨリ電報セリ

外國ニ駐劄ノ露國大使中目下ノ形勢ニ關シ本國政府ヨリ訓令ヲ受ケタルモ
ノアリ露英佛諸國ノ意向ハ干涉ヲ試ミムトスルモノ、如ク而シテ露國カ此
意思アルニ付米國モ亦東洋戰爭ノ爲メニ惹起サレタル諸問題ニ容喙セムト
スルモノ、如シ而シテ是等諸國カ適宜ノ場合ニ於テ遂ニ干涉ヲ爲ストキハ
必ス之ニ依リテ毫モ其私利ヲ圖ラサルコトニ内決シタリ各國ハ清國ニ向テ
開港ヲ要求スルナラム但シ諸國ハ清國カ其敗戦ヲ自認シ眞實ニ懺和ヲ希フ
ヲ俟ツヘシ又日本ニ向テハ清國大陸ニ於ケル寸土ヲモ日本ノ有トナスコト
決シテ歐洲ノ許諾シ能ハサル所ナレトモ其他ノ土地占有ハ必スシモ此限ニ
アラサル旨ヲ提議スヘシ船艦、武器、其他分捕品、及ヒ償金ノ事ニ關シテハ各國
ヨリ干涉ヲ試ミサルヘシ且ツ償金支拂ノ擔保トシテ日本カ或ル土地ノ方面
ヲ占領スルコトハ別ニ異議アラサルヘキモ各國ニ不利ナル通商上ノ日清約
款ハ之ヲ許サ、ルヘシ又清國ハ到底償金支拂ヲ外債ニ仰クノ已ムヲ得サル

二十五

二十六

ニ因リ歐洲ノ通貨制度ニ倣ヒ其組織ヲ改ムヘキコトヲ各國ヨリ要求セラル
ルナラム

此ノ「パリ」通信者トハ即チ彼ノ有名ナル「プロウヰツ」氏ナルコト判然タリ故ニ等
閑ニ之ヲ看過シ去ルヘカラスト思ヒタルニ由リ本大臣ハ取敢ヘス在外我カ各公
使ニ訓令シ其實否如何ヲ探偵セシメタルニ在英佛露ノ公使ハ孰レモ虛傳ナルヘ
キ旨返電アリタリ然レモ日本ニ於テ清國大陸ノ一部ヲ畧取セハ或ハ二三ノ強國
カ多少干涉シ來ルヘキ模様ハ幾微ノ間ニ見ヘタレトモ此頃迄ハ各國政府間ニ未
タ確乎タル協議モ調ヒ居ラサリシカ如シ

又清國ヨリ李鴻章カ頭等全權大臣トシテ我國ニ派遣セラルヘキコトヲ確言シ來
リ平和條約ノ談判モ愈、日ヲ期シテ開始セラルヘキ際ニ臨ミ各國政府ハ頗ル此ノ
結局ニ對シ深ク注目シ居タル狀況ハ歷々明ラカニシテ我カ海外各公使ヨリモ種
種有益ナル報道ヲ得タリ就中露國ノ形勢ニ就テハ三月廿四日在米栗野公使ヨリ
左ノ如ク電報アリタリ

米國國務大臣ハ左ノ如ク在露米公使ヨリ得タル電信ノ大意ヲ内密ニ本使ニ
告ケタリ

P.V.M. 1

1734

P.V.M. 1

1733

露國ノ欲望ハ非常ニ高大ナリ同國ハ目下ノ葛藤ニ關シ其勢力ヲ清國ニ加ヘムトス又露國ハ清國ノ北部及ヒ滿州ヲ占領スルコトヲ希望シ日本カ同地方ヲ占領スルコト及ヒ朝鮮ノ保護者トナルコトヲ肯諾セサルヘシ
三萬ノ露兵既ニ清國ノ北部ニ屯在シ其兵數漸クニ増加スルノ有様アリ
露國ノ將官士卒ハ好誼アル該政府ノ意向ヲ翻回セシメムト企テ居ルヲ以テ遂ニ日露兩國ノ利益ニ背馳スル狀況ヲ生スルニ至ルコトアラム
故ニ本大臣ハ頗ル露國ノ舉動ニ注意スルノ必要ヲ感シ時々西公使ニ訓令シ露國ノ意向ヲ探ラシメタレ_{露國政府カ西公使ニ對シ云フトコロハ在日本露國公使カ常ニ本大臣ニ對シテ云フトコロト畧ホ同一ニシテ未タ何等ノ端緒ヲモ窺知スルヲ得ス當時}_(三月二十日露京發)西公使ヨリ電報スルトコロハ左ノ如シ

露國外務省亞細亞局長ノ談話ニ據レハ過般露國政府へ申出テタル清國ノ望求及ヒ之ニ對スル露政府ノ回答ハ其意味頗ル迂濶ニシテ確定セサルモノ、如シ

清國大陸ノ讓與ニ關シ本使ノ問ニ對シ新任露國外務大臣ハ本使ニ答フルニ同大臣ハ未タ此件ニ付露國政府ノ意見ヲ云フ能ハスト雖_{露國政府}該讓與ニ對シテ

二十七

二十八

ハ他諸國ノ之ニ抗議スルモノアラムヲ恐ル、旨ヲ以テシタリ此他同大臣ノ談話ノ模様及ヒ亞細亞局長ノ言ヲ以テ本使察スルニ露國政府ノ意向ハ毫モ變リシコトナク若シ我カ土地ノ要求ニシテ臺灣及ヒ金州半島ノ外ニ出テサルニ於テハ露國ハ敢テ之ニ對シ異議ヲ申出テサルヘシト信ス要スルニ露國ノ熱望スル所ハ目下ノ談判ヲ以テ平和ニ復歸シ戰爭ノ終局ヲ見ルニアリ

又其後四月十一日同公使ヨリ左ノ通り電報アリ

露國外務大臣ハ今回清國トノ談判カ永續ノ平和ヲ以テ結了セラレ其條件ヲ履行シ能ハサルカ爲メニ再ヒ平和ヲ破ル等ノコトナキヲ望ムト告ケタルカ故ニ本使ハ同大臣ニ向ヒ我ヨリ要求ノ條件ハ同大臣ニ於テ嚴重ナリト思考セラル、ヤト問ヒタルニ之ニ答ヘテ清國公使ノ申スニハ大陸ニ於ケル讓地ハ清國ノ最モ難ムスル所ニシテ償金ノ高ハ過大ナリト言ヘリ然レトモ露國外務大臣ニ於テハ未タ其事情ヲ詳知セサレハ何等ノ意見ヲ述フルコト能ハスト告ケタリ

本月九日露國駐劄英國大使ト面談ノ節同大使告ケテ曰ク目下東洋ノ事件ニ關シテハ露國外務大臣ハ稍當惑シ居ルモノ、如シト又曰ク日本國ノ要求ハ

P.V.M. 1 1736

P.V.M. 1 1735

REEL No. 1-0333

0306

至當ニシテ英國政府ハ我カ要求ニ對シテ多分何等ノ抗議ヲ爲サルヘシト
又聞クトコロニ據レハ近頃露國陸海軍協同委員會ニ於テ露國陸海軍ハ必要
ノ場合ニ於テ日本軍隊ノ北京ニ進入スルコトヲ防止シ得ルヤトノ疑問起リ
タルニ該委員ニ於テ陸上ニテハ之ヲ爲スコト能ハサルモ艦隊ヲ用ヒ佛國ト
聯合セハ多分之ヲ爲シ得ヘシトノ議ニ決シタル由ナリ
本使ニ於テハ兵力干涉ハ多分之レ無カルヘシト思ハルレモ之ヲ防クコトニ
盡力シテ怠ラサルヘシ尤萬一ノ豫防ノ爲メ我カ海軍ニ於テ必要ノ準備ヲ爲
シ置クコト最モ可ナラム

以上縷述スル所ノ如キ始末ナルカ故ニ歐洲各國特ニ露國カ平和條約ニ對シ何事
カ言ヒ來ルヘシトハ我等ノ豫想スルトコロニシテ今回ノ事モ決シテ意外千萬ナ
リトスルニ非サリシナリ

然レトモ一月二十七日廣島 御前會議ノ決議ニ從ヒ兎モ角モ我政府ハ清國政
府ニ向テハ十分ニ戰爭ノ結果ヲ収メ置カサルヘカラスト思ヒ又内外ノ形勢ヲ察
スルニ目前ニ各強國干涉ノ來ルトキハイサ知ラス將來或ハ干涉來ルヘシトノ豫
想ヲ基礎トシ遼東半島ノ地ヲ畧取セサルノ條約案ヲ提出スルカ如キハ何人モ之

二十九

三十

ヲ首肯スル能ハサルノ事情判然タリ故ニ我政府ハ今回ノ條約ヲ締結スルニハ兎
モ角モ清國ヘ對シ終局ヲ決着スル迄ハ姑ク外國ノ事情如何ヲ顧ミス直進スルノ
方針ヲ取レリ四月十七日下ノ關ニ於テ兩國全權大臣ノ締結シタル條約即チ是ナ
リ然ルニ此條約ヲ締結スルノ以前ニ在テハ歐洲各國政府モ日本ノ請求スル條件
ハ大抵此ノ如クナルヘシトノ推測ヲ下シ得タルナルヘキモ我政府ヨリ未タ曾テ
何事モ明言シタルコトナキカ爲メ彼等ハ推測ヲ基礎トシテ議論スルコト能ハサ
ルヲ以テ其條約ノ結果如何ヲ注目シ居タルモノト見ヘタリ條約既已ニ調印シ其
大綱ハ最早世間ニ秘密ニスルノ必要ナク又之ヲ秘密ニ爲シ能ハサル場合ニ於テ
已ムヲ得ス之ヲ世間ニ公ニスルニ至リ三國ノ干涉ハ公然兩國ノ條約書ノ某々ノ
款ニ向ヒ異議ヲ唱ヘ得ヘキ地位ヲ得タルナリ
是レ露國ヲ主トシテ他二國ノ干涉シ來リタル歴史ノ梗概ニシテ如何ナル形ニテ
干涉シ來ルヘシトハ我等カ全ク豫期セサリシニモアラス然ルニ此三國カ聯合シ
特ニ獨逸カ殆ト主唱者ノ如キ位地ヲ占メ三國聯合ニ關係シタルコトニ就テハ多
少明記スヘキノ必要アリト思ヘリ抑獨逸政府ハ日清兩國事件ノ始メヨリ頗ル淡
泊ニシテ口ニハ屢日本ニ對シ友誼ヲ抱クカ如ク言ヒタレトモ裡面ニハ其臣民カ

P.V.M. 1

1738

P.V.M. 1

1737

清國ニ戰時禁制品ヲ賣却シ又ハ其國非職士官カ清國ノ軍隊ニ助力スル等ニ至リテハ毫モ異議ヲ入レタル様子ナク畢竟首鼠兩端ニシテ其間單ニ自國ノ利益ノミ是レ計リタルノ形跡顯然タリ尤獨逸政府ハ青木公使ニ向テ嘗テ英國政府カ聯合干涉ヲ各國ニ申込ミタルトキ首トシテ之ヲ拒絕シタルハ獨逸政府ニシテ日本ノ爲メニ盡力シタルモノ、如ク云ヒ做シタレハ英國政府カ提出シタル聯合干涉ヲ拒絕シタルハ唯ニ獨逸ノミナラス他ノ各強國モ殆ト之ニ同意シタルモノナク英國内ノ輿論スラモ之ニ反對シタル事實ナルヲ以テ獨逸カ獨リ此ノ英國カ提出シタル聯合干涉ヲ拒絕シタルニ付日本ヘ對シ大功アリトモ思ハレス然ルニ獨逸ハ之ヲ口實トシ屢青木公使ヲ經テ日本ニ感謝ノ意ヲ表セシメムトシ若クハ我政府ヨリ特ニ獨逸ニ對シ平和條約ノ條件ニ關シ相談セシメムトシタルノ形跡屢々徴スヘシ現ニ青木公使モ其意ヲ了シ四月十三日左ノ如ク電報セリ

若シ貴大臣カ清國ヨリ特別ナル經濟的利益ヲ求メラル、ニ於テハ獨逸國ト雖亦大ニ之ニ反抗スヘシ獨逸國ノ懇切ナル意向ニ對シ日本國ハ諸事詳カニ獨逸國政府ニ通知スヘキ責務アリ依テ一般ノ激昂ヲ和ラクルニ用フル爲メ本使ヘ報告ヲ與ヘラレタシ

三十一

三十二

依テ本大臣ハ同月十九日取り敢ヘス左ノ電信ヲ青木公使ヘ發シ置キタリ

日本國カ通商上ノ利益ヲ得タリトノ爲メ獨逸ニ於テ一般ノ驚懼ヲ惹起シタリトノ電報ニ接シ本大臣ハ大ニ疑訝ニ堪ヘス通商上ノ利益ハ最惠國條款ノ下ニ各國ノ共有シ得ルコトナルユヘ他ノ邦國ニ於テハ頗ル好感情ヲ抱キ居ルモノアリト聞ク

又同公使ヨリ四月二十日左ノ如ク來電アリ

貴大臣ノ電信ヲ受取リタル後獨逸國外務大臣ニ面會セシニ同大臣ノ意向俄カニ變シタルカ如クニテ本使ニ告ルニ日本ハ旅順口ヲ領有スルニ於テ障害ヲ受クヘシトノコトヲ以テセリ依テ本使ハ奉天省ノ南部ヲ占領スルコトハ朝鮮國ノ獨立ヲ鞏固ナラシムル爲メ必要ナルノミナラス若シ日本カ其軍人ノ鮮血ヲ以テ得タル領土ヲ保持スルコト能ハサレハ大ニ其望ヲ失フヘシトノ言ヲ以テセリ本使ハ右ノ理由ヲ述ヘ且ツ獨逸カ戰爭中ニ日本ニ對シ示シタルト同様ノ懇篤ナル政畧ヲ取ラレムコトヲ乞ヘリ外務大臣之ニ答テ同大臣ノ意見ニテハ獨逸國ハ昨秋已ニ本使ノ請求ニ應シ且ツ獨逸國皇帝陛下ノ勅命ヲ遵奉シ日本ニ對シテ充分ノ厚意ヲ示シ歐洲諸國干涉ノ企ヲ破リ且ツ

P.V.M. 1

1740

P.V.M. 1

1739

其他種々ノ方法ヲ以テ日本ヲ助ケタリ然レトモ日本ハ其報酬トシテ何事ヲ
モ爲サス獨逸ノ利益ヲ増進セズ剩ヘ獨逸及ヒ其他歐洲諸國カ清國ニ對スル
通商上ノ關係ヲ顧ミルコトナクシテ平和ノ條件ヲ專定セリ之ニ依テ獨逸ハ
最早歐洲諸國協同ノ運動外ニ居ル能ハスト告ケタリ貴大臣カ平和條件ノ細
目ヲ秘シ置カル、コトハ世間一般ノ猜疑ヲ惹起セリ獨逸國外務大臣又曰ク
日本ハ平和條約中通商上ノ條件ニ依リ不當ノ利益ヲ得タルモノ、如シト之
ニ對シ本使ヨリ他各國モ最惠國ノ待遇ヲ享有スルカ故ニ清國ニ於テ日本ト
同一ノ利益ヲ有スルコトヲ得ヘシト答ヘタルニ同大臣ハ日本ハ唯ニ勞働賃
銀低廉ノ利ヲ有スルノミナラス其國土清國ニ接近シ居ルカ故ニ此度ノ條約
ニ據ルトキハ日本ハ清國ニ於ケル歐洲諸國ノ通商貿易ニ對シ實際抵抗シ得
ヘカラサル競争者トナルヘキコトヲ説キ且ツ日本カ外交上ノ慣例ニ背キ自
儘ノ處置ニ出テタルコトヲ大ニ非難シ且ツ曰ク世界ハ決シテ日本國ノ希望
又ハ命令ニ依テ動クモノニ非ラスト
本使ハ豫メ諸強國ノ交誼及ヒ厚意ヲ失ハムコトノ危險アルヲ恐レ獨逸國及
ヒ其他諸國ニ對シ我ヨリ信任ヲ置クコトヲ示シ以テ其友誼上ノ助ケヲ得サ

三十三

三十四

ルヘカラサルコトヲ具陳セシカ貴大臣ヨリ之ニ對シ何等ノ訓令又ハ回答タ
モ無カリシ又媾和ノ件ニ就テハ本使ハ日本カ其媾和條件ヲ委シク獨逸國政
府ヘ通知セサルヲ得サル旨申述ヘタリ然ルニ之ニ對シ何等ノ貴答ナシ
日本政府ハ獨逸國ノ厚意ニ答フルコトヲ怠リタル爲メ今ヤ獨逸國ハ日本ニ
反對シテ他諸國ト共ニ運動スヘシト言明セリ加之獨逸ハ曩ニ己ニ平和ノ條
件ヲ輕減セラレ度旨日本駐劄獨逸公使ヲ經テ貴大臣ニ勸告致シ以テ清國ヲ
保護セリ右獨逸國ノ姿勢タルヤ實ニ容易ナラサルコト故之ニ對シ相當ノ處
置ヲ執ラレムコトヲ希望ス

青木公使ヨリハ右ノ如キ電報ヲ送リタルコトアレトモ本大臣ノ見ル所ニ於テハ
獨逸ハ東洋ノ利害ニ就テ甚々重要ナル國柄ニアラス又青木公使ノ電信中ニアル
日本ノ勞力カ低廉ナルト日清兩國ノ接近ナル便利アルトカ獨逸ノ商業ヲ害スル
ト云フカ如キ苦情ハ殆ト兒戲ニ類シ一顧ノ價ナキコト、思ヘリ且ツ獨逸政府ノ
真意ハ果シテ青木公使ノ電報ニ云フカ如ク我政府カ獨逸政府ノ好意ニ對シ充分
ナル謝意ヲ表セサリシニ起因シタルカ又ハ別ニ何か其自國ノ爲メニ避クヘカラ
サル事情アリテ率然此ニ出テタルカ其言フトコロ前後矛盾甚々悖謬ノ間ニ在リ

P.V.M. 1 1742

P.V.M. 1 1741

シ然ルニ其事實ハ今日ニ至リ最早明白ト爲レリ即チ日本ノ不注意ヲ憤リタルカ
爲メニ此ノ干渉ニ著手シタルニ非スシテ全ク歐洲政略的ノ考ヨリ露佛カ何事ニ
モ一致スルコトヲ妨ケムカ爲メニ自己自ラ之ニ加入シ一方ニ於テハ露國ノ歡心
ヲ買ヒ他ノ一方ニ於テハ露佛ノ聯合ヲ幾分カ淡泊ナラシメムトスルノ陰謀ニ匪
胎シタル事實ハ單ニ左ニ掲クル四月二十七日高平公使ノ電報ニテ伊國外務大臣
ノ明言スル所ナルノミナラス現ニ四月三十日發我駐英公使ヨリノ來電ニ云ヘル
カ如ク倫敦駐在獨逸大使カ加藤公使ニ内話シタル意味ニ於テモ獨逸政府ハ自家
脚下ノ火災ヲ避ケムトシ之レヲ隣家ナル日本ニ移シタルモノニシテ決シテ日本
カ彼ノ好意ニ對シ報酬セサリシカ爲メニ發シタルモノニ非サルコト瞭然タリ

(高平公使ヨリノ來電)

媾和條件ニ對スル獨逸ノ意向ニ關シ本使ハ伊國外務大臣ト長時間ニ亘ルノ
會見ヲ爲シタリ其節同大臣ハ密カニ本使ニ告クルニ左ノ事ヲ以テセリ
獨逸ハ伊國ノ協同ヲ望ミタレモ伊國ハ之ヲ拒絕シタリ今回獨逸ヲシテ動カ
シメタル底意ハ全ク之ニ由リテ歐洲大陸ノ政畧上ニ於ケル佛露同盟ヲ斷チ
遂ニ佛國ヲシテ孤立ノ地位ニ立タシメムトスルニ在リ然レトモ獨逸ヲシテ

三十五

三十六

露國ヲ合同シテ餘リ威力ヲ逞フセシムルハ許スヘカラス或ル程度ニ於テ其
勢力ヲ遏止セサルヘカラサルナリ斯ル事情ナルカ故ニ若シ英伊米ノ三國ヲ
シテ結合セシメ日本ノ味方タラシムルヲ得ルニ於テハ干渉問題モ由々敷大
事ニ至ラスシテ濟ムヲ得ヘシ然レトモ若シ之ヲ爲サムトセハ日本ハ先ツ此
三國ノ協同ヲ請求セサルヘカラス其上ニ於テハ伊國ハ悦ムテ英米兩國ヲ引
誘スヘシ元來今回ノ事件ハ頗ル狂言的ナルカ故ニ獨逸ト伊國ハ毫モ^{トリス}三國同
盟ト抵觸セスシテ反對ノ地位ニ立ツヲ得ルナリ

又伊國外務大臣ハ此事件ヲ結了スヘキ日本政府ノ方策及ヒ目今新聞紙ノ報
告スル所ノ獨佛露三國ヨリ公然日本政府へ提出シタル事柄ノ詳細ヲ知り得
タシトノコトナリ

(加藤公使ヨリノ來電)

英國駐在ノ獨逸國大使ハ其書記官ヲ遣シ本使ニ面晤ヲ求メタル故本月二十
九日本使ハ同大使ヲ訪ヘリ
大使曰ク露國ノ感情益々激昂シ佛國ハ今トナリテハ同盟ヲ去ラムト欲スルモ
之ヲ爲シ得ヘカラサルナリ又獨逸國ハ從來ハ勿論今日モ日本國ニ對シ常ニ

P.V.M. 1

1744

P.V.M. 1

1743

友情ヲ懷キ居ルカ故ニ圓滑ニ本件ヲ結了セシメムト欲スル情甚タ切ナリト
本使ハ大使ニ向ヒ若シ獨逸國カ斯ク迄日本國ニ對シ友情アラハ何故ニ同盟
ニ加ハリタルヤト詰問シタルニ大使ハ夫レトハ明言セサレハ歐洲交渉ノ政
畧ハ獨逸國ヲシテ同盟ニ加ハラシメタル眞實ノ原因ナリトコトヲ暗ニ言
ヒ顯ハセリ又是レト同時ニ大使ハ獨逸國カ同盟ニ加ハリタルハ日本國ノ爲
メニ幸ナリ何トナレハ獨逸國ハ露佛兩國ニ説キテ大ニ其要求案ヲ輕減セシ
メタリト告ケタリ

大使ハ日本國カ遼東ノ一時占領ニテ満足セラレヘキヲ勸告シ所謂一時ノ占
領ハ將來何時モ永遠ノ占領ニ變換スルヲ得ヘシト言ヒ其先例ヲ示セリ且ツ
永遠占領トマテ至ラサルモノニシテ日本國ニテ承諾スヘキ取捌方アレハ本
使ヨリ通知次第本使結了ニ盡カスヘキ旨本國政府ヘ申し立ツヘシト言ヘリ
同大使ノ得タル報告ニ據レハ清國ハ多分條約ヲ批准スヘク然レモ批准ハ各
國ノ抗議ヲ減スルコトナク却テ日本國カ其邦土ヲ拋棄スルニ於テ困難ヲ加
フヘシト云ヘリ

而シテ露國ハ獨逸ノ此事アルヲ奇貨トシ實ハ己レ主人ナルモ故ラニ賓客ノ地位

三十七

三十八

ニ立チ獨逸ニ誘ハレタルカ如キ体ヲ汝ヒ其素志ヲ達セムトシ四月二十三日日本邦
駐在公使ヲシテ獨佛兩國公使ト聯合シ帝國政府ヘ左ノ如キ宣言ヲ提出シタリ

露國皇帝陛下ノ政府ハ日本ヨリ清國ニ向テ要求シタル媾和條件ヲ査閱スル
ニ遼東半島ヲ日本ニテ所有スルコトハ當ニ常ニ清國首府ヲ危フスルノ恐レ
アルノミナラス是レト同時ニ朝鮮國ノ獨立ヲ有名無實ト爲スモノニシテ右
ハ將來極東永久ノ平和ニ對シ障害ヲ與フルモノト認ム因テ露國政府ハ日本
國皇帝陛下ノ政府ニ向テ重テ其誠實ナル友誼ヲ表セムカ爲メ茲ニ日本國政
府ニ勸告スルニ遼東半島ヲ確然領有スルコトヲ放棄スヘキコトヲ以テス
事既ニ此ニ至ル本大臣ハ以爲ラク露國政府カ最初ヨリ其胸裡ニ包藏シタル野心
ヲ發露シ得ヘキ機會ニ乘シ特ニ獨佛兩國ヲ誘引シテ茲ニ干涉ノ本相ヲ顯ハシ來
タルニ際シ如何ニ樽俎ノ間ニ折衝スルモ到底其功ヲ收ムヘキニアラス又此ノ如
キ場合ニ於テ我レ獨リ對手國ニ向テ口舌ノ勞ヲ取ラムヨリハ寧ロ我カ後援ヲ他
ノ強國ニ求メ之ヲ牽制スルノ得策ナルニ若カス且ツ前記ノ如ク伊國外務大臣ハ
高平公使ニ向テ云々シタルコトアルヲ以テ若シ此際英國政府ヲシテ我カ援助ヲ
爲サシムルコトヲ得英伊米ノ三國ヲ聯合シテ露獨佛三國ニ當タレハ或ハ三國干

P.V.M. 1

1746

P.V.M. 1

1745

涉ノ極度ニ至ラサルニ之ヲ牽制シ得ヘキ望ナキニアラス又假令ヒ不幸ニシテ炮火相見ルニ至ルモ固ヨリ我獨力ヲ以テ三國ニ當ルノ比ニアラスト思惟シタルニ由リ一面ニハ西公使ニ電訓シ今日帝國政府カ露國政府ノ勸告ヲ容ル、コトノ困難ナル事情ヲ陳辯シテ同政府カ之ヲ撤回セムコトヲ請求セシメ佗ノ一面ニハ加藤公使ト栗野公使トニ電訓シテ英米政府カ如何ナル度合マテ帝國ヲ援助スルヤヲ確カメムトシタリ因テ四月二十五日西公使ニ發シタル電信ハ左ノ如シ

貴官ハ内密ニ露國外務大臣ニ向テ露國政府ハ其勸告ヲ再考スルコト出來サルヤヲ問ヒ既ニ我 皇帝陛下カ媾和條約ニ 御批准濟ノ今日ニ在リテ遼東半島ヲ拋棄スルコトハ我政府ニ於テ至難ノコトナル旨ヲ同大臣ニ告クヘシ

貴官ハ以上ノ事ヲ乞フニ當リ日露兩國間ニハ永年親密ノ好誼ヲ存スル旨ヲ述ヘ今日ニ於テ善鄰ノ關係ヲ誤ルヘカラサルコトヲ説クヘシ又日本ニ於テ遼東半島ヲ割取スルトモ毫モ極東ニ於ケル露國ノ利益ヲ危殆ナラシメス而シテ朝鮮國獨立ノ事ニ關シテハ日本政府ハ露國政府ヲシテ十分満足セシムヘキ處置ヲ執ルヘキ旨ヲ云フヘシ

三十九

四十

又日本政府ハ此件ニ關シ未タ獨佛兩國政府ヘハ何等ノ照會ヲモ爲サ、レハ露國政府ヨリ好回答ヲ得次第之ヲ爲ス積リナル旨ヲ露國外務大臣ヘ告クヘシ

又二十六日加藤公使ヘ發シタル電訓ハ左ノ如シ

日本國ニ於テ奉天半島ヲ永久ニ占領スルコトニ付三國政府カ唱フル所ノ故障ハ左ノ四項トス

- 一、朝鮮獨立ハ有名無實トナルヘシ
- 二、歐洲各國ノ商業上ノ利益ヲ防碍ス
- 三、清國ノ帝都ヲ危フス
- 四、東洋ノ平和ヲ危フス

日本政府ハ歩ミ合ノ方法トシテ左ノ辨明ヲ提出ス

- 一、日本政府ハ朝鮮國獨立ニ關シテハ事ノ自國ニ係ル限リハ誠實ニ歐洲各國ヲ満足セシム
- 二、日本政府ハ奉天半島ニ於テ營口及ヒ外一港ヲ自由貿易港ト爲スヘシ斯クスレハ國境通過稅ハ普通海關稅ヨリ稅率低クシテ且ツ一港ハ終

P.V.M. 1

1748

P.V.M. 1

1747

年氷結スルノ患ナク船舶ノ出入自由ナレハ奉天半島ノ占領ハ歐洲商
業上ノ利益タルコト疑フヘカラサルナリ

三、該半島ノ占領ハ北京ヲ危フスルモノトスヘカラス然レモ一步ヲ讓リ
テ之ヲ危フスルモノトスルモ是レハ重ニ清國ニ關スル問題ナレハ清
國ニ於テ鐵道ヲ布設セハ其危難ニ對スル防禦ニハ餘リアルヘシ

四、區劃明瞭分界正確ナル境ヲ清國ニ接シ居ル歐洲諸國ノ經驗ニ徵スル
ニ東洋ノ平和ヲ危フストノ恐レアルコトナシ故ニ國境ノ境界線ヲ確
實ニ定メタル以上日本政府ハ清國ト善隣ノ交ヲ結テ平和ヲ保持シ難
キ理由アルヲ見ス

閣下ハ前記ノ讓歩提案ヲ極内密ニ英國外務大臣ニ示シ左ノコトヲ申サレ
ヘシ

日本政府ハ本件ニ關シ英國ノ利害ハ他ノ歐洲各國ノ利害ニ超越シ居ルノ
事實ヲ認メ居ルカ故ニ第二項ニ於テハ特ニ此等ノ利益ヲ調和スルコトヲ
勵メタリ

閣下ニ於テ都合宜シト思ハレナハ左ノ事ヲモ申出シ英國政府ノ意中ヲ聞カ

四十一

四十二

ルヘシ

滿州東北部及ヒ朝鮮ノ北部ニ對スル露國ノ覬覦ハ此度同國ノ爲シタル要
求ニ因テ之ヲ察スルニ足レリ故ニ目下ノ情況稍迫リ居ルニ付テハ日本ニ
於テ前ニ記スル所ノ如ク三國ニ返答シタル時ニハ日本ハ何程迄英國ノ助
力ヲ待受ケ得ヘキヤ

又同日栗野公使ニ發シタル電訓ハ左ノ如シ

左ノ通り米國國務大臣ニ告クヘシ

日本政府ハ現今ニ於ケル米國ノ友誼アル意向ニ對シテ感謝ノ至リニ堪ヘス
日本政府ハ友邦ノ提出ニ係ル正當ノ異議ヲ無視セムト欲スルモノニアラサ
レモ既ニ清國ヨリ我國ニ奉天半島ヲ讓與スルノ條約ヲ我 皇帝陛下ニ於
テ 御批准濟ノ今日ニ在リテ同半島ヲ拋棄スルハ甚々至難ノコトナルノ
ミナラス日本政府ハ斯ル拋棄ヲ必要トスルノ事情アルヲ認ムルヲ得ス
若シ米國ニシテ是迄平和ノ爲メニ盡サレタル所ノ友誼ヲ進メ日本ノ奉天半
島ヲ永久ニ占有スルニ對シテ異議ヲ挿ミ居ル露國ニ向テ其再考セムコト
ヲ勸告セラル、ニ於テハ或ハ満足ニ此ノ未決問題ノ結了ヲ見ルニ至ルヲ得

P.V.M. 1.

1750

P.V.M. 1

1749

ヘシ
日本政府ハ露獨佛三國ノ運動ニシテ或ハ清國ヲ誘引シテ條約ヲ擲棄セシメ
遂ニ再ヒ炮火相見ルノ己ムヲ得サルニ立到ラムコトヲ恐ル而シテ斯ル結果
ハ出來得ヘクハ宜ク未發ニ防遏スヘキヲ以テ帝國政府ハ内密ニ米國ノ友誼
アル協力ヲ希望スルモノナリ

然ルニ加藤公使ヨリ四月二十七日倫敦發ニテ左ノ電報ヲ送致セリ

四月二十六日付貴電ニ基キ本使ハ同二十七日英國外務大臣ニ面晤シタルニ
同大臣ハ頗ル懇篤ナル様子ニ見受ケタリ本使ハ同大臣ニ對シ我政府ヨリ提
出シタル讓歩ヲ以テ今回ノ事件ヲ結了セムトスルニ當リ日本ハ豫メ英國ノ
協力ヲ期シ得ヘキヤト問ヒタルニ同大臣ハ本使ニ答フルニ英國政府ハ此事
件ニ關シ一切干涉セサルコトニ決シタリ而シテ英國カ日本ニ協力スルコト
ハ抑亦一ノ干涉ニ外ナラス爲メニ事体ニ一新面目ヲ啓クコトナルカ故ニ總
理大臣「ロースベリ」伯ト相談ノ上ナラテハ返答シ難キ旨ヲ以テシタリ又同
大臣ハ此度我ヨリ提出ノ讓歩ニテハ到底露獨佛三國ヲ満足セシムル能ハス
ト思考スルヲ以テ英國ハ該讓歩ヲ基礎トシテ日本ヲ補助スルコト頗ル難カ

四十三

四十四

ルヘント云ヒタリ而シテ多分明日其決答ヲ爲スヘキ旨本使ニ約シタリ
又同外務大臣ハ露獨佛三國ニシテ果シテ如何ナル程度マテ其異議ヲ主張ス
ル意向ナルヤヲ知ラスト雖も形勢頗ル容易ナラサル有様ナルカ故ニ日本ハ
之ニ對シ十二分ノ覺悟アル方得策ナラム又英國ハ平和ヲ望ムヲ以テ日本カ
歐洲諸國ト干戈ヲ交ユルヲ好マサルハ勿論日清戰爭ヲシテ繼續セシムルコ
トヲモ欲セサルナリ故ニ英國ハ目下ノ困難ヲ解除スルノ機會ヲ失ハサラム
コトヲ務ムヘシ英國ハ日本ニ對シ友情ヲ抱ケトモ露獨佛三國トモ亦友邦ノ
關係ヲ有セリ故ニ英國ハ此際ニ處スルニ當リ彼是酌量ノ上其威嚴上決斷ト
責任ヲ以テ運動スルノ必要アル旨ヲ申述ヘタリ
本使ハ豫テ在伊高平公使ヨリノ通知ニ因リ伊國政府ノ執ラムトシツ、アル
方針ヲ知り居ルヲ以テ英國外務大臣ニ向テ此際當事件ヲ結了スルノ好案ア
リヤト問ヒタレトモ同大臣ハ否ト答ヘ再ヒ前述ノ言ヲ繰返シ英國政府ハ刮
目シテ當事件ノ成行ニ注意スヘキ旨ヲ述ヘタリ尙ホ同大臣ノ決答ヲ得次第
更ニ電報致スヘシ

加藤公使ハ重テ四月二十九日發ニテ左ノ電報ヲ送レリ

P.V.M. 1

1752

P.V.M. 1

1751

REEL No. 1-0333

0314

英国外務大臣ハ本日左ノ通り確答ヲ爲シタリ
英國政府ハ曩キニ局外中立ヲ守ルコトニ決シタレハ此度モ同一ノ意向ヲ維持セムト欲ス英國ハ日本國ニ向テ最モ懇篤ナル感情ヲ懷クト同時ニ己レノ利益ヲモ考ヘサルヲ得サルニ付提議ノ讓歩ニ關シ日本國ヲ助クルコト能ハス而シテ該讓歩ハ各國ヲ満足スルニ足ラス又露國ハ眞ニ決心スル所アルカ如シ

栗野公使ヨリハ四月二十七日華盛頓發ニテ左ノ電報ヲ送致セリ

米國國務大臣ハ同國局外中立ノ主意ト矛盾ヒサル限リハ日本ト協力スルコトヲ承諾セリ而シテ條約ノ批准ヲ清國ニ勸告スヘキ旨在北京米公使ニ訓令スヘシ

而シテ西公使ヨリハ四月二十七日聖彼得堡發ニテ左ノ電報ヲ送致セリ

四月二十五日付貴電ニ基キ本使ハ力ヲ盡シテ露國政府ヨリ提出ノ勸告ニ關スル我カ請求ニ對シ都合ヨキ同政府ノ回答ヲ得ムコトヲ勉メタリ

四月二十六日本使ハ露國外務大臣ト長時間談論ニ及ヒタルニ同大臣ハ大ニ感スル所アルカ如キ色アリ而シテ再ヒ露國皇帝陛下ノ勸意ヲ伺フヘキコト

四十五

四十六

ヲ約セリ然ルニ今日ニ至リ同大臣ハ露國皇帝陛下ニハ露國ノ勸告ヲ翻回スヘキ充分ノ理由ナシトノ故ヲ以テ我政府ノ請求ヲ承諾シ玉ハストノ旨ヲ本使ニ回答シタリ

本使ハ露國ヨリ提出シタル抗議ノ程度ヲ確知シ能ハサレトモ目下露國政府ハ運送船ヲ遣リ「オデッサ」ニ於テ軍隊派出ノ準備中ナリトノ風聞アリ故ニ豫メ露國ノ干涉ハ重大ナルヘシト覺悟シ居ル方安全ナラム

以上露英米三國ニ駐在スル我公使カ政府ノ訓令ヲ奉シテ其任國ノ政府ニ照會シタル結果タリ今ヤ帝國政府ハ英伊米三國ノ好意ヲ博シタルニ係ラス實際其後援ヲ望ム能ハサルコト明白トナリ且ツ露國ノ到底我カ要求スル所ヲ容レサルノ意モ亦確實ナルヲ知リタリ而シテ西公使ハ從來露國政府カ帝國政府ノ遼東半島ヲ畧取スル重ナル異議ハ專ラ朝鮮壤土ト接近スル土地ヲ帝國ノ所領ニスルニ在リトノ意見ヲ抱キ兩三回モ其旨ヲ申來リタルコトアリ特ニ四月二十五日左ノ電報ニ接セリ

露國外務大臣ハ本使ニ告テ曰ク露國政府ハ媾和條件ノ改更ヲ日本ニ勸告スルコトニ付獨佛兩國ニ同意シ日本ニ於テ遼東半島ヲ占領スルコトハ永久ニ

P. V. M. 1

1754

P. V. M. 1

1753

北京ヲ嚇嚇スルモノニシテ且ツ朝鮮ノ獨立ヲ危殆ナラシムルモノナルカ故ニ此事ヲ日本政府ヘ提議スヘキ旨在東京露國公使ニ訓令シタリト是ニ於テ本使ハ同大臣ニ向ヒ前露國外務大臣在任ノ頃ヨリ露國政府ハ屢日本ニ朝鮮ノ獨立ヲ害セサラムコトヲ望マル、旨述ヘラレ日本政府モ亦勉テ其安全ヲ計リタルモ本使力屢露國外務大臣ニ述ヘタル如ク將來我國カ清國ニ對シ自衛ノ爲メ且ツ朝鮮ノ獨立ヲ鞏固ナラシムルニ必要ナル爲メ日本カ遼東半島ヲ占有スルコトニ對シテハ未タ曾テ露國ノ異議ヲ聞キタルコトナキニ今日俄ニ之ヲ承ルハ誠ニ驚人リタルコトナル旨ヲ答ヘ且ツ露國政府ニシテ斯ル意外ノ異議アリタラムニハ疾クニ之ヲ言明セラレサリシハ遺憾ノコトナル旨ヲ申述ヘタルニ同大臣ハ既ニ三國決意ノ今日ニ在リテハ東京ヨリノ回答ヲ待ノ外ナシト云ヒ該勸告ヲ容ル、様日本政府ヘ申立ツヘキ旨本使ニ請求シタリ本使之ニ答ヘ此ノ如キ申立テハ蓋シ其益無カルヘシ如何トナレハ日本政府ハ幸ニ大戦勝ニ引續キ起リタル日本軍人ノ過大ナル希望及ヒ國民一般ノ激論ヲ抑制シ漸ク其要求ヲ遼東半島ニ限リタル今日ニ在リテ更ニ又同半島ヲ拋棄スルハ實ニ至難ナルノミナラス且ツ日本ハ既ニ同半島ニ於テ種

四十七

四十八

種ノ改革ニ著手シ又多數ノ本邦人民ヲモ彼地ニ移植シタリト申述ヘタリ又此外ニハ別ニ本使ニ於テ辨シ得ヘキ用ナキヤトノ本使ノ問ニ對シ同外務大臣ハ東京ヨリノ回電ヲ待チ居ルヲ以テ目下別ニ本使ニ依頼スルコトナシト答ヘタリ

是ニ於テ本使ハ同外務大臣ニ向ヒ露國政府ハ餘リ硬ク其勸告ヲ主張シ日本政府ヲシテ遂ニ其勸告ヲ容ル、ニ付國內ニ於ケル非常ノ反對ニ抗スルカ若クハ我軍人ノ感情及ヒ國內ノ輿論ニ從ヒ已ムヲ得ス絶對的ニ外國ノ勸告ヲ拒絕スルカノ二策ノ一ヲ執ラシムルニ至ラシメサラムコトヲ希望スル旨申陳ヘタルニ同大臣ハ暫時沈黙シテ稍憂色アルモノ、如クナリシモ露國政府ハ其企圖ヲ容易ニ中止スヘシトハ本使思考スルコト能ハス露國政府カ斯ク俄ニ意向ヲ變更シ獨國ト同盟スルニ及ヒタル結果今日ノ如キ大事ノ地位ニ立至リシハ本使ノ最モ遺憾トスルトコロナリ若シ貴大臣ニシテ到底我國カ干涉ヲ排却スルニ堪ヘストノ御決心ナレハ本使ノ考フルトコロニテハ朝鮮ニ境土ヲ接スルトコロノ土地ヲ拋棄シ而シテ他ノ地方ハ手強ク之ヲ要求スルコト得策ナルヘシ

P.V.M. 1

1756

P.V.M. 1

1755

此ノ電信ヲ本大臣カ接手スルト間モナク恰モ前記同公使ヨリ露國政府カ帝國政府ヨリ遼東事件ニ付再考ヲ求メタルモ肯諾セサル旨ノ電信ヲ受領シタルニ因リ本大臣ハ四月三十日ヲ以テ露獨佛三國政府ニ向テ左ノ申入ヲ爲セリ

日本帝國政府ハ^{露國皇帝陛下}ノ特命全權公使閣下カ其本國政府ノ名ヲ以テ帝國政府ヘ差出サレタル覺書ヲ最モ慎重ニ査閲シ了セリ

日本國皇帝陛下ノ政府ハ^{露國皇帝陛下}ノ政府ノ友誼ノ勸告ヲ熟考シ且ツ茲ニ再ヒ兩國間ニ存スル親密ノ關係ヲ重視スル證據ヲ表彰セムト欲スルカ故ニ下ノ關係約ノ批准交換ニ因リ日本國ノ名譽ト威嚴トヲ完フシタル後別ニ追加定約ヲ以テ該條約中ヘ左ノ修正ヲ加フコトニ同意ス

第一 帝國政府ハ其奉天半島ニ於ケル永代占領權ハ金州廳ヲ除ク外ハ總テ之レヲ拋棄スルコトニ同意ス尤日本國ハ其拋棄シタル領土ニ對シ之レニ代フヘキ報酬トシテ相當ナル金額ヲ清國ト協議シテ之ヲ定ムルコトアルヘシ

第二 然レトモ帝國政府ハ清國ニ於テ日本ニ對スル其條約上ノ義務ヲ全然履行スルマテハ擔保トシテ前記ノ領土ヲ占領スルノ權アルコト

四十九

五十

ト知ルヘシ

右ノ電報ニ關シ西公使ハ露國外務大臣ト面會ノ結果トシテ五月三日付ヲ以テ左ノ通り電報セリ

本使ハ本月一日我覺書ヲ露國政府ヘ差出シカチ極メテ我カ提議ヲ貫カムト論辯セリ

本月三日露國外務大臣ニ於テ露國政府ハ我覺書ハ満足スル能ハサル旨ヲ言明シ且ツ曰ク昨日内閣會議ヲ開キタルニ該會議ニ於テ日本國カ旅順口ヲ所有スルコトハ障害アル故ニ其最初ノ勸告ヲ主張シテ動カサルヘシト閣員一致ニテ決議シ而シテ該決議ハ露國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タル旨中間ケタリ本件ニ關シ本使ハ露國外務大臣ニ向ヒ力ノアラム限り手ヲ盡シタレトモ遂ニ露國政府ヲシテ別ニ本件處理ノ方案ヲモ提出セシムルコト能ハサリシハ本使ノ最モ遺憾トスル所ナリ

此ノ如ク露國政府ハ再ヒ我カ提案ニ對シ不承知ヲ唱フルノミナラス此際恰モ四月二十九日露京發西公使ノ電報ニ據レハ同公使カ露國外務大臣ト面晤ノ要畧トシテ左ノ電信ニ接シタリ

P.V.M. 1

1758

P.V.M. 1

1757

近頃露國外務大臣ト長時間面談ノ節本使ノ探リ得タル所ニテハ露國カ我大陸ニ於テ讓地ノ要求ニ反對スル所以ノ底意ハ一旦日本カ遼東半島ニ於テ好良ノ軍港ヲ手ニ入レタル後ハ日本ノ勢力ハ敢テ該半島内ニ限ラス將來ニ於テハ朝鮮全國及ヒ滿州北部ナル豊饒ノ地全体ニ及ホシ日本國ヨリ夥多ノ殖民此レニ移住シ遂ニハ日本國ノ版圖ニ歸シ海陸ニ於テ露國ノ領土ヲ危殆ナラシムルコトヲ恐ル、ニ在リ

是ニ至テ最早露國政府ノ意向ハ遼東半島ノ寸土尺地モ我帝國ノ所領トスルヲ肯セサルヲ知ル且ツ其表面口實トスル所ハ朝鮮ノ獨立ヲ空名ニ歸セシムル等ニ在リト雖也其實ハ佗日自己侵畧ノ地ヲ爲サムト欲スルニ在ルコト愈々分明ニシテ若シ帝國政府カ更ニ一新勁敵ヲ生スルノ覺悟アルニアラサレハ到底其勸告ニ從ハサルヲ得サルノ事機切迫シタルニ因リ我政府ハ全然露國ノ勸告ヲ容ル、コトニ決シ五月五日遂ニ三國政府ヘ左ノ通り申込メリ

日本帝國政府ハ露、獨、佛三國政府ノ友誼アル忠告ニ基キ奉天半島ヲ永久ニ占領スルコトヲ拋棄スルヲ約ス

之ニ對シ五月九日ニ至リ在東京ノ露、獨、佛三國公使ハ各其政府ノ訓令ニ依リ日本

政府ノ措置其宜シキニ出テタル爲メ一般ノ平和ヲ得タルヲ賀スル旨ヲ言明シ三國干涉ノ一件ハ茲ニ其局ヲ結フニ至レリ

1759

P.V.M. 1

五十一

1760

P.V.M. 1

五十二

右事件ニ關スル廟議摘要

我政府ハ朝鮮事件ノ發端ヨリ外國干涉ノ來ルヘキヲ慮カリ居レリ故ニ今回ノ事
モ必スシモ意外トハ爲サ、リシ但當時内閣員ノ多數ハ東京ニ在リト雖モ内閣總
理大臣ヲ始メ陸海軍大臣等ハ帷幕ニ參シテ廣島大本營ニ在リ又近日京都ニ行幸
アルヘキ筈ナルヲ以テ一ニ閣員ハ業已ニ先發シタルモノモアリ外務大臣ハ病
ヲ養ヒ舞子ニ在リシ等ニテ閣員各地ニ分居シテ斯ル重要事件ヲ處辨スルニハ頗
ル不便ヲ感シタルヲ以テ或ハ舞子ニ集リ或ハ京都ニ會シ又ハ東京ヨリ招致シ此
ノ事件ヲ處置スル爲メ種々ノ要點ニ就キ熟議ヲ遂ケタリ

抑今回露獨佛三國ノ干涉ハ表面各友邦ノ忠言ヲ名トシタルモノナレトモ裡面ヨ
リ觀察シ來タレハ如何ナル禍心ヲ含有スルヤ疑ヲ容ルヘキモノアリ而シテ此ノ
三國カ今聯合シテ云々スル所アレトモ果シテ徹頭徹尾同體一致ノ運動ヲ爲シ得
ヘキヤ之ヲ詳言スレハ兵力干涉ヲ爲スニ至ルマテモ一致ノ運動ヲ爲シ得ヘキカ
或ハ其極度ニ至レハ三國遂ニ分離スルコトナキヤ又三國カ終始一致ノ運動ヲ極
度マテ爲ストモ或ハ露一國カ極リ極度ノ運動ヲ爲ストスルトモ果シテ彼ハ戰爭

二

ヲ開始スル迄ノ決心ヲ有シ居ルヤ或ハ單ニ日本ヲ威嚇シテ其勸告ニ服從セシメ
ムトスルニ止ルヤ宜ク我廟算ヲ一定セサルヘカラス而シテ斯ク外部ニ向ヒ緩密
ニ考察ヲ下スト同時ニ内部ノ形勢如何ニ考察ヲ下スト時ハ當時我征清軍ハ全國ノ
精銳ヲ悉シテ遼東半島ニ駐屯シ我強盛ナル艦隊ハ盡ク澎湖島ニ集リ居リ内國陸
海軍備ハ殆ト空虚ノ有様ナルヲ以テ若シ一朝事變起ルカ如キコトアラハ如何ニ
シテ之ヲ防禦スヘキヤ縱令ヒ外交上ノ手段ニ依リ其極度ノ破裂ニ至ルノ時期ヲ
遷延シ我軍艦ノ澎湖島ヨリ歸航スルヲ待チ又獨佛二國ヲシテ露國ト極度ノ際ニ
至リ分離セシメ單ニ露國ノミヲ正面ノ敵トスルヲ得ルトスルモ十閱月間戰爭ヲ
繼續シ來リタル我軍艦ハ果シテ露一國艦隊ニ抗敵スルヲ得ヘキヤト云フ諸要點
ニ就キ四月二十四日廣島御前會議ニ於テ今日ノ現狀清國ノ外新タニ倭ノ敵國ニ
抗戰シ得ヘカラスト決議シタリ既已ニ此ノ如ク決議シタル上ハ三國ノ勸告ニ對
シテ其全部若クハ幾部分ヲ承諾セサルヲ得ストハ自然ノ結果トシテ之ヲ避クヘ
カラサルナリ

既ニ三國ノ勸告ヲ承諾スルモノトスレハ遼東半島ヲ還付スルノ報酬ヲ清國ヨリ
請求シ其報酬ヲ得ルヲ條件トシテ半島ヲ還付スヘキヤ若クハ無條件ニテ之ヲ還

付スヘキヤ今ヤ遼東半島ヲ清國ニ還付スヘシト請求スルモノハ清國ニ在ラスシ
テ三國干涉ノ結果トシテ之ヲ還付セサルヲ得サルニ至リタルモノナレハ其報酬
ヲ請求スルニハ先ツ三國ニ對シ其勸告ヲ容ル、ノ條件トシテ彼等ヲシテ清國ヨ
リ日本ニ對シ其報酬ヲ拂フヘキ周旋ノ勞ヲ執ラシメ得サルニアラス然レモ帝國
政府ハ已ニ下ノ關係約ノ批准交換ノ期日ハ五月八日ト定メラレタルヲ以テ若シ
之ヲ經過スルトキハ自然ニ該條約ノ全體ヲシテ故紙ニ歸セシムルノ恐レアルコ
トヲ信セリ而シテ三國ノ干涉ニシテ事局未タ結了セサル間ハ清國ハ豫定ノ期日
ニ批准交換ヲ行ハサルヘキハ自然ノ情勢ニシテ乃チ清國ヲシテ期日ニ批准交換
ヲ行ハシムトセハ何時ニテモ遼東半島ニ駐屯スル我軍隊カ直チニ山海關或ハ
太沽ヲ衝キ踵テ北京城下ニ進入スルノ自由ヲ有セサルヘカラサレトモ三國政府
ノ干涉繼續シテ絶ヘサル間ハ我軍隊カ顧慮スル所ナクシテ此ノ目的ヲ達シ得ヘ
カラサルヤ論ヲ埃タス故ニ若シ遼東半島ヲ還付スルノ條件トシテ清國ヨリ多少
ノ報酬ヲ得ムコトヲ三國政府ノ周旋ニ依頼セムカ(此ノ如クセハ或ハ報酬ヲ得ル
コト比較上容易ナリシナラム)又ハ寧口日
本政府ハ遼東半島ノ處分ニ關シ自ラ進テ列國政府ニ請求シ所謂列國會議ナルモ
ノヲ開キ同會議ニ於テ此ノ始末ヲ結了スヘキカ種々ノ關係ト種々ノ手段トニ就

三

四

キ細密ニ考察ヲ遂ケタル上竟ニ左ノ如ク論結シタリ

方今ノ時機ニ於テ帝國ハ清國以外ニ新敵ヲ生スルノ不得策ナルコトヲ決定
シタル上ハ露獨佛政府ノ干涉ニ對シ我レヨリ多少ノ修正ヲ要求スルモ遂ニ
其聽カレサル時ハ極度マテ彼等ノ勸告スル所ヲ容レ一日モ早ク此ノ事局ノ
葛藤ヲ解キ清國ヲシテ豫定ノ日ニ條約ヲ批准セシムルコトニ盡力スヘシ其
理由ハ此ノ如クセサレハ萬一清國政府ニ於テ批准交換ヲ躊躇スルモ我軍隊
ハ直チニ之ヲ懲責スルノ自由ヲ得ス而シテ若シ此ノ自由ナシトスレハ清國
政府ハ必ス批准交換ヲ拒絕スルカ若クハ公然拒絕セサルモ種々ノ口實ヲ設
ケテ遷延シ其實拒絕ト同一ノ結果ヲ生スルノ恐レアルヲ以テ帝國政府ハ寧
ロ一方ニ於テハ三國政府ノ勸告ヲ全然容納スルモ清國ニ對シテハ最初ノ目
的ヲ極度マテ實行スルノ自由ヲ有セサルヘカラス約言スレハ三國ニ對シテ
ハ全體ヲ讓歩スルモ清國ニ對シテハ一步モ讓ルヘカラス三國政府ノ干涉事
件ヲ以テ清國ノ條約批准事件ト牽聯セシメス勉テ之ヲ分割シ各單獨ノ處置
ヲ取ルコトニ決定シタリ

斯ク決定シタル上帝國政府ハ猶ホ一方ニ於テハ苟モ事局ヲ勉メテ穩便ニ結了セ

1763

P.V.M. 1

1764

P.V.M. 1

0320

REEL No. 1-0333

ムカ爲メ又彼等ノ底意如何ヲ試ミムカ爲メ三國政府ニ向テ數次理ヲ悉シ情ヲ述
ヘ辯論スル所アリ又一方ニ於テハ更ニ佻ノ強國ノ援助ヲ求メ若シ不幸ニシテ兵
馬相見ルニ至ルモ獨力危ナ踏ムノ禍ヲ避ケムトシ英米伊等ト密ニ氣息ヲ通シタ
ルモ別冊ニ記スルカ如ク事遂ニ目的ヲ達スルヲ得サルノ場合ニ至リタルヲ以テ
乃チ豫メ廟議ニ於テ定メラレタルカ如ク全然露獨佛三國政府ノ勸告ヲ容レ遼東
半島ハ帝國ニ於テ永久ニ所領セサルコトヲ約シタリ但之ヲ清國へ還付スルノ措
置ハ帝國ト清國トノ間ニ於テ商議スルノ權ヲ存セリ

右ノ如ク帝國政府カ種々外交上ノ手段ヲ盡シタル後頗ル迅速ニ又容易ニ三國政
府ノ勸告ヲ容ル、ニ至リタル所以ハ一方ニ於テハ今日我國ハ露一國ニヌラ猶ホ
抗敵スル能ハサルノ事實アリシト佻ノ一方ニ於テハ下ノ關係約ノ批准交換ノ豫
定期日迄ニハ是非共三國政府ノ交渉ヲ全ク割斷シ以テ清國政府ヲシテ其背後ニ
頼ムヘキ援助ヲ失ハシメムト企圖セシニ由ル而シテ清國政府ハ期日ニ至リ多少
ノ故障ヲ云ヒシニモ係ラス遂ニ批准交換ヲ行ヒタリ

然ルニ帝國政府カ何故ニ遼東半島ヲ還付スルノ條件トシテ報酬ヲ求ムルコトヲ
三國ノ周旋ニ依頼セサリシカ又何故ニ列國會議ニ依頼セサリシカト云フニ此ノ

五

如クセハ其報酬ヲ得ルニ於テハ或ハ多少容易ナルヘク又將來日清兩國間ニ談判
ヲ開クノ煩ヲ避ケ得タルナルヘシト雖也其三國政府ノ周旋若クハ列國會議ノ行
懸リトシテ本月八日ト豫定シタル批准交換ノ期日ヲ延期セサルヲ得サルノ結果
ヲ生スルノ虞アリ又之ヲ延期シ日清兩國ノ平和回復ヲ久ク未定ニ付シ置クトキ
ハ其間如何ナル事變ヲ生スルヤモ計ラレス即チ清國ニ與フルニ條約ノ佻ノ部分
ニ向テ多少ノ違言ヲ發セシムルノ機會ヲ以テスルコトナキヲ保セス且ツ或ハ露
獨佛三國以外ノ強國ヲシテ遼東半島事件ノ外ニ如何ナル干涉ヲ來タサシムヘキ
ヤモ亦保シ難キヲ以テ日清交戦ノ結果トシテ條約ヲ訂結シ其訂結シタル條約ノ
上ニ多少ノ變更ヲ生シ其變更ヲ生シタル結果トシテ更ニ多少ノ報酬ヲ求ムル等
ハ單ニ日清兩國ノ間ニ取極メサルヘカラサルニ我レヨリ佻國ノ周旋又ハ列國ノ
會議ヲ求ムルカ如キ事アラハ之ヲ嚆矢トシテ今後日清兩國ノ交渉事件ニ於テ歐
洲強國ノ容喙ヲ招クノ惡例ヲ遺スノ恐レアルノミナラス若シ三國政府ノ周旋ニ
依頼スルコト、スレハ一方ニ於テハ彼等干涉ノ結果トシテ我レヲシテ遼東半島
ヲ清國ニ還付セシメタルニモ拘ハラズ之ニ對スル報酬ヲ得ル爲メニハ三國ノ功
勞ヲ謝シ永ク三國ノ恩誼ヲ受クルノ姿ニ立到ルコトハ今日ノ場合ニ在テ我政府

六

1765

P.V.M. 1

1766

P.V.M. 1

0321

REEL No. 1-0333

モ我國民モ決シテ堪得ヘキ所ニアラサルヲ以テナリ
以上ノ理由ナルヲ以テ帝國政府ハ寧ロ三國政府ニ向テハ全然讓歩スル所アルモ
清國政府ニ向テハ斷然寸歩モ讓ラストノ決意ヲ以テ此ノ如キ紛糾錯雜ナル外交
事局ヲ僅々二週日ノ間ニ結了シ危機一髪ノ厄運ヲ將ニ發セムトスルニ防キ百戰
百勝ノ結果ヲ將ニ失ハムトスルニ取メタルハ一ニ廟議其機ニ投シ事ノ宜キヲ得
タルニ職由セサルハアラス是レ即チ大詔ニ所謂今ニ於テ大局ニ顧ミ寬洪以テ事
ヲ處スルモ帝國ノ光榮ト威嚴トニ於テ毀損スル所アルヲ見ス「トノ聖意ヲ奉體シ
タルニ外ナラサルナリ

七

P.V.M. 1

1767

REEL No. 1-0333

0322